

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

ぶらつく・ぶれつとif

転生した少年とIQ210の少女

【作者名】

篠崎峡

【あらすじ】

ある朝目覚めると、高校二年生の少年如月 響太郎は自らに二人分の記憶があることに気づく。転生とは言い難いそれに戸惑う響太郎は、『呪われた子どもたち』の一人である千寿 夏世と出会う。自らに宿った能力に蝕まれながら、彼は民警としてガストレアと戦うことを決意する。その背中を預かる少女は、彼に何を見るのだろうか。

第1話 疑心と邂逅

俺は、誰だ。

それが俺が目覚めてから行った最初の思考だった。

自分の名前を確認する。俺の名前は どちらの世界でも如月きよつたろう響太郎、か……。

おかしい。

俗にいうならば、俺は『転生』したはずだ。

俺には記憶が二人分ある。それはまだ良い。それでこそ転生した、と認識できるんだからな。だが

どちらが本物の俺かわからない。

片方の記憶は第二次世界大戦終結から70年程が経ち、各地の紛争は尽きないものの大規模な戦争にはならず平和を享受していた世界の記憶。

もう片方は人類がガストレア戦争に敗北してから10年程経ち、その後東京エリアで暮らしてきた記憶。

「クソツタレ、なんなんだよコレは……ッ」

自身の現状に堪らず悪態をつく。自分が何者かわからない事がこれほど苛立つとは。序列の付けられる『二つ』の記憶ではない。ただ『二人分』の記憶があるだけなのだ。これじゃまるで横並びになったセーブデータだ。右が一つ目なのか、左が一つ目なのかわからない。……じゃあ俺はそのセーブデータで遊ぶプレイヤーってとこか。

特に頭痛がしているわけでもないが、自身についての詳細がわからないことへの焦燥から思わず頭を押さえる。

「とりあえず外に出よう……」こっちは、どっちの世界なんだ……」

一歩外に出てまず目に入ったものは、天高く聳える黒柱だった。チクシヨウ、依りにもよってこっちの世界かよぶざけんな。俺はどっちの世界でもただの16歳、高校二年生だ。……こっちの世界だと勾田高校の二年生か。どちらにせよ戦う力なんてもってねえつつの。ふと春特有の草木の香りが鼻を突く。チッ、学校なんて行ってられっか。今日はフケるぞ。

ボサボサの黒髪を手入れをすることもなく服だけ制服に着替え、アパート下に停めてある自転車にダラダラと乗る。いや制服つつても学校には行かねえけどな。手頃な服がなかったただけだ。

「どっ行くかな……」

特にアテがあるわけじゃない。が、とりあえずこっちの世界のことは確認しておきたい。知ってる世界だけだな。

気づけば自転車はモノリスへと向かっており、辺りは閑散とした外周区だった。いくらアテがないとは言え、デカイものの方へ向かうとか流石に短絡的すぎだろうが……。

「ぐアッ!」

突如、キーンと言つ甲高い音を伴い激しい頭痛が響太郎を襲つ。急ブレーキをかけて何事かと辺りを見回すが、周囲は静寂で回答する。だが、響太郎の直感に告げていた。『モノリスへ向かえ』、と。

特に理由があるといったワケじゃない。あるのは明らかに嫌な予感と、それでも進めと告げる勘だけだ。自転車のペダルをブン回し、そびえ立つモノリスへと疾走する。背景を彩る倒壊した建物への皮肉の如く綺麗に整備された道路を突っ走る響太郎の行く手を阻んだものは、意外にも何かに撥ねられたような勢いで道路の右側から転がり出た少女だった。

「くはッ……！」

「な……ッ?!お、オイお前」

「お話は、あとにしてください。死んだら、お話できません」

「またもや急ブレーキをかけ、反射的に話しかけた響太郎の言葉を正論が遮る。」

「 私が押しとどめますから、あなたは逃げてください」

「 はア!? バカかお前」

「 言いかけて、数瞬前の状況を頭で再生する。こいつ、まさか……それに『アレ』って」

予感不幸にも全体的中した。少女は立ち上がり、年齢不相応な速度で元来た方向へ駆けだす。その一瞬で捉えた響太郎の目は、彼女が今世間で、いや世界中で忌み嫌われている“赤目” 則ち、ガストレアウィルスを体内に宿した『呪われた子どもたち』であることを認識していた。

そして、彼女が向かった方向へ目を見やると そこには顔だけで縦5メートルは超えるであろう蟻型をした『ガストレア』がその右前足を少女に殴りつける瞬間だった。

だが刹那、少女の目が一層強く赤色に輝いたかと思うと、彼女は右腕でその足を受け止め、払いのける。

「 凄え、と響太郎が外見10歳程度の少女に対して思ったままの感想を述べようとした直後、ガストレアが左前足で少女の空いた右脇腹へ鋭い殴打を加える。端正な顔を一瞬だけ苦痛に歪ませた少女の体は宙を舞い、道を通つ切つて既に崩れたかつてのビルの外壁に全身を打ち付け静止する。」

「 大丈夫かッ!?!」

「 あいつ、戦い慣れてないのか 何故だかはわからないが、響太郎」

の体は無意識に彼女の元へと向かっていた。

「ば……ばかですか……どうして今のうちに逃げなかったんですか……」
「いやお前だつてさつさとやられてたじゃねえか」
「それを言われるとなんとも言えませんね……」
「そもそも私の能力は戦闘向けの能力じゃありませんから……、とか何とか言つてやがる。んなこと言つてる場合かよ……」。

突如、こちらのささやかな応酬を全く意に介さず地を砕く音が鳴り響く。チクシヨウ、俺じゃコイツを守つてやれない 向かつてくるガストレアから目を背けるようにして響太郎は目を閉じる。

刹那、低く濁った音が響太郎の耳を貫き、つかの間の静閑が訪れる。しかし、響太郎はその音の寸前に自らの横をすり抜ける気配を感じていた。 目を開きたくない。

その思いを無視するように横方向へ一陣の風が吹き、直後。どさりととまるで荷物の如く何かが地に着く。寸秒前の感情が上書きされる。響太郎はその双眸を干切れる程に見開き、音のした方角を見やる。そこには、腹部に大穴を空け力なく倒れこむ少女の姿があった。そのままガストレアへ居直り、その禍々しい容貌を感情の消えた目で見据える。

クロス

そう意識した瞬間、響太郎の頭に『何か』が流れ込み、彼は瞬時に

らない言葉の後に、突然感謝の意を示され響太郎は面食らってしまった。

「む。なんでポカッとしてるんですか」

「……その、悪い」

「どうして謝るんですか」

「いや……お前さっき俺を庇ってアイツに刺されただろ？その、それが」

「あの時あなたが刺されればおそらく即死だったので。それならば私が身代わりになった方がダメージは軽微で済みます」

「……え」

「え、とはなんですか。あの状況ではベストの選択でした」

「……それなら俺を押し飛ばせば良かったんじゃないのか」

「そうしたら私の頭が刺されてしまいます。さすがに脳の再生は未知数なので、実践できませんでした」

「……そうか」

見かけ通り、というのが適切だろう。俺よりもよく考えて動いてるんだな、コイツは。

「……ありがとな。……あ、俺は名前は如月 響太郎だ。お前は？」

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私は千寿 夏世です」

そうして俺は、一人の少女と出会った。

その出会いが意味することを、俺はまだ知らない。

第2話 決意

響太郎と夏世は寂れた一本道をモノリスから遠ざかるようにして歩いていった。別に理由があるわけではなく、ただ進む方向が同じであるというだけだ。途中でサンングラスを掛けた民警にガストレアについて聞かれたが、よもや「民警でもないただの人間ですが気づいたら倒してました」などと言うわけにも行かないので「他の民警がもう倒しましたよ」と適当な事を言って誤魔化した。やはり民警同士の横のコネクションは強くないようで、サンングラスの民警は「チックショー帰るぞミスウィート」などとよくわからないことを言いながらインシエーターと連れ立ってさっさと帰っていった。

「あの」

響太郎の左にいる少女が小首を傾げながら響太郎を見つめる。

「あなたは、『奪われた世代』ですよね」

端的な言葉だったが、それだけで夏世が言おうとしていることを悟る。改めて見ると、夏世の来ているくすんだクリーム色のワンピースはあちこちにほつれがあり、修繕した形跡も見受けられる。それだけで響太郎は、夏世の過ごしてきた日々の苛烈さがなんとなく察することができた。

「ああ、そうだよ」

「あっさりした受け答えですね……」

「俺は別に『赤目』だからどうとかそういう差別意識はねえよ」

嘘だった。

響太郎は先のガストレア大戦で家族の全員を失っている。父、母、姉、妹。落ち着いた雰囲気のと対照的に女三人は喧しく疲れるときも多々あったが、響太郎はそんな家族が別段嫌いというわけではなかった。

だが母が地元である地方の産婦人科で響太郎以外の家族全員の立会の中、四人目の妹を生む直前にガストレア大戦が勃発した。そし

て、皆死んだ。響太郎がその時生き延びたのは貧血でたまたま東京の病院に入院しており、出産にただ一人立ち会わなかったからだ。

ガストレアが全てを狂わせた。響太郎は今も変わらずそう思っている。あの後響太郎の前に現れた家族は最早タンパク質ですらなかった。ただの灰だった。これがどうして俺の家族なんだ、ふざけるなど周囲に当たり散らした。返ってくる答えは自分の喘鳴で舞う、焦げた灰の臭いだけだった。今日でも家族の死を思い出す度に響太郎は吐きそうになる。ガストレアが憎い、と純粹に思う。

恐らくこの世界の記憶しか持っていない『普通の人間』であったならば、例え『呪われた子どもたち』に命を救われたとて、響太郎は彼女を貶め蔑視しただろう。だが皮肉なことに、響太郎には『もう一人分』の記憶がある。

貧血で入院していた響太郎の病室へ甲高い笑い声が飛び込んできたかと思うと、見慣れた四人の家族が入ってくる。そしてスマートフォンで撮影した新しい家族の写真を見せ、なんでアンタはこんな時に入院すんのよと姉がバシバシ背中を叩く。

その後は、実に一般的な、平和な日々だった。

退屈に明け暮れる毎日に響太郎は刺激に少しばかり憧れたりもしていた。四女の夏菜^{かな}は今日10歳の誕生日だったか。誕生日プレゼントをまだ買ってないなと思いだし、今日の放課後にも買ってくるかと思案していたが、目覚めた時にはこちらの世界にいた。

どちらが本当の響太郎であるのかは当の本人ですらわかっていない。むしろ本人だからこそわからないのかもしれない。

そんな響太郎の葛藤を知ってか知らずか、夏世がはつきりと言い捨てる。

「嘘ですね」

「な」

「それどころじゃない、とでも言いたげな表情をしています。まるで……自分がどうしてここにいいのかわからないような表情です」

「……そうか」

夏世の察しが良すぎるのか、はたまた響太郎の表情が年端もいかぬ少女に悟られるほど表に出ていたのか。どちらにせよ要らぬお節介だった。でも、と区切って響太郎はぶっきらぼうに続ける。

「お前には関係ねえよ」

「そうです……ね。不要なお節介でした」

やはり擦れた生活で敏感になっているのだろうか、夏世は響太郎の心情を察して早々に話を切り上げる。無言で歩き続けると、夏世が口を開いた。

「じゃあ、私はここで。先程はありがとうございました」

ただ、と軽いステップで響太郎の前に出た夏世が、丁寧に会釈をして別れを告げる。全くと言っていいほど気持ちの整理ができていない響太郎は、後ろ髪を引かれる思いを断ち切れずおもむろに口を開く。

「あー……いや、その……ね」

「なんですか？」

「その……その「コンビニ」で「コーヒ」でも買ってかねえか？」

「私は紅茶派です」

クソツタレ、なんで俺は10歳の女兒相手にナンパの真似事してんだ。しかもなんで間髪入れずにお前も返答してくんだよ。コントかオイ。

自分の発言を失言とみなして頭を抱える響太郎を見て、夏世が微笑む。

「しょうがないですね、行ってあげます」

「なんで上から目線なんだよ」

「ナンパしてきたんですから、当然です」

「10歳児相手にナンパなんてすっかよ……」

心中を見透かされたようで、つい言葉尻が濁る。その上、視界に入る建物の中に「コンビニ」は見当たらない。夏世もそのことに気づいたのか訝しんだ声を上げる。

「「コンビニ」、無いですね」

「無いな」

「……私と一緒に居たかったんですか？」

齒に衣着せぬ物言いとまさにこの事か。響太郎は不本意ながら感心する。

「……そつだよ」

今更言い訳を重ねたところで、どうせ見破られるだろうしな。

どうやら夏世はその言葉が予想外だったようで、キョロキョロと視線が泳いで狼狽するがすぐ元の感情の薄い表情に戻る。

「へ……変態ですね」

「違えよー」

「いえ……10歳の幼女相手に『一緒にいたい』なんて言うてくる人、初めて見ましたから」

響太郎は閉口する。

確かにそんな事言う奴なんざそうそういないだろうけど……。

再度並んで歩きながら逡巡し、物言いたげな顔で響太郎は夏世を見つめる。

「……どうかしましたか？」

「あ……いや……あの、な……お前この辺で暮らしてんのか？」
何が気に食わなかったのか、夏世が少し膨れる。

「夏世です」

「……え？」

「夏世って呼んでいいです」

「お、おっ」

「私からは、なんて呼べばいいですか？」

「これ誘導尋問じゃないだろうか。」

「響太郎でいいよ」

「……はい」

心なしか、少し夏世が嬉しそうに見える。

「それで」

「その通りです。私は今、この近くで暮らしてます。所謂 マンホールチルドレンです」

「そうか」

深刻に言うのも返って侮辱に当たると思い、わざと軽く返事をす
る。

「変わった人ですね」

「んあ？」

しまった、マヌケな声が出やがった。

しかし、夏世はそんな事を意にも介さぬ様子で続ける。

「私が……『呪われた子どもたち』だって知っても、響太郎は助けてく
れました。……もしかすると、あなた自身どうして私を助けたのか、
わかってないかもしれませんけど」

「んなことは……」

「それでも、私は嬉しかったです。今まで私は忌むべき者として邪険
に扱われてきましたから」

響太郎は夏世の綺麗な微笑みを目の当たりにして思わずドキッ
とする。照れ隠しで視線を逸し、後ろ髪を搔く。

「目の前で死にそうな人がいんのに、見捨てられっかよ」

「でも、響太郎だって死にそうだったじゃないですか」

「返す言葉もねえな……」

「あ、コンビ二見えてきましたよ」

「おごってくださいって、ありがとっぴいびいます」

「いやお前……最初からそのつもりだっただろ」

「もちろんです」

無い胸を張るな。そう言いかけて飲み込む。

「む、今失礼なこと考えましたよね」

「ん……んなことねえよ」

10歳児の鋭い指摘に面食らい、誤魔化すようにコーヒートのプルタ
ブを開ける。

コンビ二の近くには寂れているが遊歩道らしきものがあり、二人は

そこに設置されたベンチに腰掛けていた。

響太郎の右にちょこんと腰掛けている夏世がミルクティーのプルタブを開け、思い出したように呟く。

「これ自販機で売ってますよね」

「う、うるせえ、コンビニで買った方が安いんだよ」

「人をナンパしたくせに、ケチなんですね」

そう言って夏世が悪戯っぽい笑みを浮かべる。コノ野郎……。

お互い缶に口をつける。体感時間で数分経っただろうが、響太郎は何か話そうと話題を探る。

「……………」

突然の上ずった声に、響太郎は並々ならぬものを感じて即座に夏世を見る。視線が交錯。響太郎の視線の先にある夏世の目尻には、うっすらと涙が滲んでいた。

「……………」

視線を前方に戻し、響太郎は独り言のように話します。

「信じてくれるかくれないはどうでもいいけどよ、俺、自分がどこの誰なのかわかんねえんだ」

一拍置いて続ける。

「今日起きたら……………俺には一人分の記憶があった。ガストレア大戦で敗北したこっちの世界の記憶と、ガストレアなんていなくて平和な世界の記憶。俺は……………どっちが本当の俺なのかわからない。どっちも10年前まではあまり変わらない生活だった。……………でも、ガストレアが現れてからこの10年間の……………記憶だけじゃない、感情の隔たりも……………」

そこまで吐き出すように喋ると、急に夏世が口を挟んだ。

「別にいいんじゃないですか」

「は？」

「別に、いいんじゃないでしょうか」

「何がだよ」

「響太郎は今、ここにいます。私には記憶が一人分しかないので響太郎の気持ちはわかりません。……………でも、響太郎は二人分の記憶を合

わせて”響太郎なんじゃないですか。二つの記憶を統べているモノこそが響太郎だと、私は思います。それに、響太郎が私のことを助けてくれたこと、本当に感謝してます」

「……わけわかんねえよな、俺」

夏世はフォローしてくれているのだろう。もちろん響太郎もそれは理解しているが、事態の不可解さが響太郎を苛立たせる。

「 真実を、知りたいんですか」

夏世が神秘的な面持ちで尋ねる。

「……ああ」

「何故、と聞くのは野暮ですか」

「いや 仮に、俺の頭にある二人分の記憶が両方とも本物だとしたら、ガストレアのいない世界に行くことが可能なんじゃねえかな、つてな」

「そう……ですね。でも、もし行けたとしてもそこは私たちが過ごしてきた世界ではないです。知らない世界に放り出されると言っつのは、未知の生物であるガストレアに侵食されたこの世界と、私たちにとって本質的にはなんら変わりません」

「そういっもんかな」

「きつとそうです。私たちにはそつちの世界の記憶がないんですから。たとえそこに存在する人間が生物学的に私たちと同様のヒト科であったとしても、その世界に行った人は宇宙人のいる星に送られたような気分になると思います」

「そつかもしねえな……だけど、10年前に両世界が完全に別の運命を選択したのは、間違いねえんだ。何が二つの世界の命運を分けたのか知ることさえ出来れば、この世界を変えられるかもしれない」

そこまで言っつて、響太郎は自分の思考に驚いた。

『「この世界を変えられるかもしれない」大げさにも程がある言葉だ。だが、きつとこんな言葉が出るといっつことは則ち 響太郎は知らず知らずのうち心中でガストレアがいない世界を憧憬しているのだらう。』

ひと通り考えを巡らせて、響太郎はため息を付いた。

少し俯きながら呟くその言葉の本源は、目の前の人間を信用しきれ
ていないと言つことだろうか。それとも

夏世の目を見つめ、響太郎はこれまでで一番真面目な声ではっきり
と言つ。

「お前がいいんだ」

「えへへ」

夏世の顔がくしゃり、と柔らかい表情になる。

「よろしく、お願いします。響太郎」

「ああ。よろしくな、夏世」

夏世が嬉しそうに破顔する。いつになく幸せそうなその表情に感
化されて、響太郎の顔も自然と綻ぶ。

俺一人だったら、挫けていただろう。理解を諦めて、投げ出して
ただろう。

揺らぎ続ける自身の存在を、夏世が繋ぎ止めてくれた。

これから、前途多難な道のりが俺たちの行く手を阻むかもしれな
い。

それでも。

俺は真実に近づきたい。世界の真実に、俺自身の真実に。今ならそ
う思える。

おこがましいかもしれないと思いつつ、意を決して口を開く。

「一緒に見つけよう、真実を」

「はい」

顔に紅葉を散らした夏世の朗笑は、まるで天使みたいだと響太郎は
思った。

第3話 後援者

そして、俺は民警になった。

民警認可証ライセンスと言うから、何か国家資格のように捉えていたが、そもそも民警は警察の代わりにエリアを守護することだ。狭き門としようにも出来ないのだろう。

普通に試験を受ければもう少しかかったのだろうが、悠長に受けている時間がもつたいなく感じ、寝る間も惜しんで試験場に入り浸って、二週間と少してライセンスを取得することが出来た。

こんなガキを雇ってくれる会社などないだろうと言うことで、書類にはとりあえず所属を『如月民間警備会社』と書いておいた。致し方なく二人で起業する旨を担当者に話したが、やはり子どもだけではダメなようで、どつやら一ヶ月以内に経営者を見つけないといけないらしい。全く面倒極まりないことだ。

ライセンス取得に奔走していた分、クラスには進級早々から三週間近く通っていない。

「まあ、大して学校生活が楽しかったわけじゃねえし、構わねえけどな」

六畳一間のボロアパートで朝を迎えながら、響太郎はボソリと呟く。

こちらの世界では、家族がガストレア大戦で全員死んでから高校に上がるまで、響太郎は東京エリアに暮らしていた遠い親戚の世話になっていた。見方を変えれば死にぞこないである響太郎の家での扱いは、彼にとって忌み嫌われている『赤目』たちと大差ないように思えた。

行き場のない怒りを当てる先を見つけたと言わんばかりに罵詈雑言を浴びせられたし、暴力も振るわれた。『赤目』と違ってガストレアウイルスを保菌していない響太郎の身体は、暴力を受けても即座に回復しない。理不尽な理由で義父に殴られて数日間身体が思うように

動かず、寝込まざるをえない日もあった。

それでも、食事と住む場所を与えられて生きてきたことを考えると、自分は『呪われた子どもたち』よりも丁寧に扱われてきたに違いない。

隣で安らかな寝息を立てる少女を横目で見ながら、響太郎はそんな自分の過去を皮肉に感じていた。

彼女たち『呪われた子どもたち』は、何も好きでガストレアウィルスを保菌して生まれてきたのではないのだ。にも関わらず、能力を開放した時に見られる赤目は、かつて人類を蹂躪したガストレアを彷彿とさせる。ガストレア大戦後に生まれた子どもが『赤目』だと判明した瞬間、親は狂ったように自分の子どもを川に捨てたりなどして殺害した。彼女たちが『無垢の世代』などと呼ばれているのは、先のガストレア大戦で惨状を目の当たりにした『奪われた世代』からの最大級の嫌味なのだろう。

だが、彼女たちに、罪はない。

『呪われた子どもたち』の一人、千寿夏世と僅かだが共に日々を過ごしてきた響太郎は、既に『呪われた子どもたち』に対する考えを改めていた。

敵対視するから、拒絶するから何も進まないんだ。理解しようとなぜしないんだ。

そう憤慨して、直後響太郎は自分の思考を恥じた。

俺は、完璧にこの世界の人間じゃない。

今の響太郎にはもう一人分、ガストレアなど現れず、十年前と今も変わらず平和な生活をしてきた『如月 響太郎』の記憶と思考がある。そちらの世界の響太郎からすれば、『ガストレア』や『呪われた子どもたち』と言つのは、退屈な日常を刺激するには充分すぎる玩具おもちゃだった。

その好奇心が、『呪われた子どもたち』に対する考えを改めさせることに拍車をかけているという事実は、胸糞悪く感じざるを得ない。

「理由はどっつあれ」などと一蹴しようにもしきれないものがある。記憶や思考が複数人分あるというのは、想像以上に不快極まりないもの

だった。

「どうしたんですか、響太郎」

気づいたら夏世を見つめ続けていたようで、起きた夏世が不審そうな目でこちらを見ていた。

「……あ？ いや、別に何も……」

突然のことでした。どろもどろな返答になってしまふ。それが夏世の疑念を増大させたのか、彼女はさらに目を細めて呟く。

「いやらしいことでも、考えてましたね」

「違えよー」

「じゃあさっきの、『ああこの幼女食べたい』みたいな表情はなんですか」

「んな顔してねえよッ！ 大体カニバリズムなんか興味ねえつつの！」

つい布団から飛び起きて否定する。

「冗談ですよ」

「……あのなあ」

「すごく、辛そうな顔をしていましたから。響太郎」

「……悪いな、氣イ遣わせてよ」

「ペアなんですから、氣を遣うのは当然です」

胸を張るように答える夏世。

実は彼女も響太郎が民警認可証の取得に勤しんでいる間に、国際イニシエーター監督機構、通称EISSOでイニシエーターになるべく訓練を受けていた。あらゆる試験をギリギリでクリアした響太郎と違い、モデル・ドルフィン^①のイニシエーターである夏世は、戦闘能力自体は大して高くないものの記憶能力やIQ、戦闘サポート能力に長けており、夏世のIQが210だと聞いた時には、響太郎は驚いてびっくりかえってしまった。あるうことが響太郎の三倍以上ある。

「それより」

夏世がおもむろに切り出す。

「^{パトロン}後援者、見つけないのですね」

「あー……そつだな……」

苦い表情で後ろ髪を掻きながら応える。

そう、後援者だ。

新興の民警である上に社員は二人とも未成年。そんな連中の後援者になってくれそつな企業、ましてや個人など、響太郎には全く当てがなかった。

「とりあえず、ご飯食べませんか」

「……だな」

ボサボサの上に寝ぐせがあちこちで見受けられる黒髪を掻きながら洗面所へ行き、顔を洗う。

目下の不安は、まともに民警として働けるかどうか。後援者もいなければ武器もない。高校に入ってから家は放逐されたのでバイトに明け暮れていたが、実を言うと家賃をはじめ生活費でほとんど消えていったため貯蓄もない。大家には頼み込んで保証人無しで住まわせてもらっているの、家賃の滞納など出来ないのだ。だがライセンスを取得する際に、不幸にもバイト先へ休暇の申請を忘れていたためサボり扱いされたようで、昨日携帯に届いたメールを見たらクビにしたとの通告が来ていた。

「ちよつとマズったんじゃねえか、コレ」

眠気の取れない顔を拭きながら、投げやりに呟く。すると、そこへ追い打ちを掛けるようにして恨めしい色の言葉がのしかかる。

「……響太郎……」

「な、なんだ夏世」

「……冷蔵庫、空っぽです」

「……あつ」

「その上、ご飯もパンもありません」

「マジかよ」

「うどんもありませんでした」

「ご丁寧にごつも……」

「どうして素麺もないんですか」

「なぜそのチヨイスなんだ」

しまった。昨日はライセンス取得ができたことに慢心して、買出しに行くのを忘れてた。民警が飯も食えずに野垂れ死にとか勘弁だぞチクショウ。

「……今日はコンビニにしよう」

「そんなお金あるんですか」

訝しむ目をしないでくれ。

「まあ、しょうがないですね……早くお仕事見つけましょう？」

微笑みながらそう言って、何かに気づいたのか夏世が呆れたような顔をする。

「……そういえば、武器とか、何もなかったですね。私たち」

「言っなよ」

とりあえず本当に何も無い家にいるのも虚しい気持ちになるだけなので、着替えた後二人揃って外にでる。

「朝ですね」

「当たり前じゃねえか」

「……響太郎、学校いいんですか」

「……」

閉口した。どこで手に入れたかなど聞く気はさらさら無いが、今夏世はそこそこ綺麗に手入れされたワンピースを着ている。対して響太郎は、勾田高校の徽章が縫い付けられた黒スーツそっくりの制服を着ていた。別に好き好んで着ているわけではなく、私服のセンスが無いので無難な制服を着ているというだけだ。

……私服をほとんど持っていないのもあるけどな。

「行かないなら、別にいいんですけどね」

「ん？ ……そうか」

「一緒に居られますから」

「なんだよそれ」

「そういつとんです。……行きましょっ」

夏世に促されて、アパートの鍵をして日向に出る。斜めから差し込む春の陽気が優しく二人を包み込む。貧乏な未来しか見えてねえのに呑気な空だと響太郎は心の中で悪態をつく。

二人は、外周区近くのコンビニに来ていた。

響太郎はこのコンビニでも同じだろうと言ったのだが、外周区の方が安売りしているかもしれないと夏世が言い張るので、自転車に二人乗りをして外周区近くまで行くことにしたのだ。

「お前が行くって言ったのに、どうして俺が漕いでんだ」

「響太郎の方が歳上なんですから、当然じゃないですか」

「あのなあ」

「……それとも、私の後ろに乗りたいですか？」

10歳の少女が漕ぐ自転車の後ろに乗る高校生。これは想像しただけでヤバイ。色々とヤバイ。

「い、いや俺が漕ぐ」

そろそろコンビニが近いということ、響太郎がスピードを上げようとしたその時、ライセンス発行時に支給された携帯がけたたましい音を立てた。

「なッ、なんだッ?!」

「……近くに、ガストレアが出たみたいです。先にそっちへ行きましょっ」

報酬も貰えますし、と夏世が同じく支給された携帯を見ながら咳く。

「で、警察の様子はッ?!」

コンビニに続く道を進まず、おもいつきりスピードを上げてガストレアのいる方向へ曲がりながら響太郎は叫ぶ。

「……監視カメラシステムが見つけたようなので、まだ警察も他の民警も着いていないと思います」

「よし、なら一番乗りだッ!」

瓦解しかかったビルの合間を縫って、ガストレアのいる場所へ急行する。

GPSが示すガストレアの位置まで後数十メートルの距離に接近

したところで、響太郎はビルの影に身を潜めるようにして隠れている。スーツ姿の男性に気がついた。年齢は50を過ぎたくらいだろうか、それでも顔つきはしっかりしており快活そうな男だ。

「お、おいアンタッ！ ガストレアはッ?!」

「き、君は……?」

「俺は民警だ！ さっき近くでアラートが出たから来た、警察は?」

ライセンスを出しながら言う響太郎に、男はほう、とその全身を観察するように眺めると、口を開いた。

「……どうやらアレは感染源じゃなくて感染者みたいだね。それと、まだ誰も到着していないよ」

「そうか、じゃあアンタはここに居てくれ。そのガストレアは俺たちが始末する」

自転車を降り、慎重にガストレアのいる位置へと接近。二つほどビルを進んでから覗くと、黒塗りの高級車の上で蠢く巨大なクモが目についた。

「……アレだな」

「そつみたいですね」

頼む、と響太郎が言うより先に、夏世が力を開放する。瞬刻前まで黒かった目が爛々と朱色の光を放つ。

「行けます」

「わかった……行くぞッ!」

夏世の合図の直後、響太郎は全く無警戒のガストレアの目前に踊り出た。

千寿夏世は、モデル・ドルフィンのイニシエーターである。その特性として主に言われることは高い知能であるが、イルカの持つ『特性』はもう一つある。

パルス音による対象把握と伝達能力。

イルカには高い周波数を持つパルス音を発し、反射した音からその対象との位置関係や特徴を把握できる能力がある。さらに、把握したそれをパルス音で他のイルカに伝達することも可能だ。イルカの因

子を持つ夏世は、無論その能力が使える。彼女が力を解放し続ける限り、響太郎は鷹の目を得たと言わんばかりに戦場の全てが把握できる。

先手必勝

ガストレアが明後日の方向を向いた刹那、真横に踊り出た響太郎は左足を踏みしめ、半身を捻って右足に力を込める。

蹴り方は知っている。前も使った。

敵を感知したガストレアが振り向いた瞬間、響太郎は渾身の蹴り初めてガストレアを撃破した時と同じ蹴りだ　を放つ。

「ハアアアアアアアアアアッ！」

毒腺のある牙が襲いかかるよりも早く、響太郎の蹴りがガストレアの頭部を丸ごと破壊。

一瞬前まで頭部があったその部位からは体液が溢れだし、数秒苦しむように痙攣してガストレアは沈黙した。

「……撃破、です。完全に沈黙しました」

「ハアッ……ハア……ッ……そ、そうか……」

どういふ経緯かは全く分からないが、二人分の『如月 響太郎』の記憶を認識してしまった初日。その日出会ったガストレアの思考が突如脳内に入り込んできた響太郎は、それが戦いの中で繰り出そうとしている蹴りを完全に理解し、あるうことかその技を刹那の後に使用した。力加減、筋収縮　全てをまるで既に知っていたかのように繰り出したあの蹴りの構造。それはあれから三週間近く経過した今でも、まるで自分が習得した技であると言わんばかりに脳内に焼き付いている。

だが、本来ならその技はガストレアの異常な筋力によってこそ本領を發揮する。ただの人間である響太郎がそれを繰り出せば、身体に掛かる負荷は並大抵のものではない。

「君たち……どっちがイニシエーターなんだい？」

ビルに隠れていた男が姿を現し、面白がるような声を出す。沈黙する二人を前に、男は堪えきれなくなったのかついに笑い出した。

「ッハッハッハッハッ！ いや、いいよ君！ 気に入った！ どの
民警だい？ 後援者はもういるのかね？」

「いや、後援者はまだいねえけど……」

困惑した様子で答える響太郎を他所に、男はより嬉しそうになる。

「ハハハッ！ そろそろか！ まあ高校生の民警の後援者になるな
んて奴はそついないもんなあー！」

「……」

「いや、すまないすまない。別に気分を害そうとしたワケじゃないん
だよ。……それにどうやら、あまり大きな民警にも所属してないよ
うだ」

乗り捨てた自転車を振り返って男がそう言う。

「だから、どうだろう？ 私を君たちの後援者にしてくれないだろ
うか？」

「………は？」

予想外の男の言葉に、理解が追いつかない。

「言葉の通りさ！ なんなら、似た歳の民警が所属してるところの紹
介もしようか?！」

「……いや、アンタは……？」

「おや、テレビとかで見えていないかね。私は紫垣しがき 仙一せんいち。天童家の元

執事で、今は……そつだな、資産家つてとこだ」

「ハア?! ンだそりゃ?！」

「そ、そんな人が私たちの後援者に……？」

天童家と言えば、何人もの政治家を輩出している名家だ。流石の響
太郎でも知っている。

驚くまま正直な感想を漏らす響太郎と、冷静に驚愕を露わにする夏
世。どちらが歳上なのかわからないその光景に、紫垣はさらに楽しそ
うな表情になる。

「うんうん、ぜひ私を後援者にしてくれ！」

「ホントに、良いのかよ俺たちで」

自分たちのような新興の民警を相手にするには、あまりにも
立っている土俵が違いすぎる大物の言葉に、つい疑いをかけてしま

う。

「本当さ、ぜひお願いするよ」

どこか不敵な笑みを浮かべる紫垣に、響太郎は折れた。

「……ああ、そんなに言っならそっしてくれ。俺たちとしても、願った
り叶ったりだ」

「……ありがとうございます。よろしくお願いします」

折り目正しく礼を言う夏世に、響太郎は自分の発言が少しだけ恥ず
かしくなった。

「ハハハ！ じゃあよろしく頼むよー」

「それで……俺と似た歳の民警がいるところって？」

流石にこのまま先の見えない『如月民間警備会社』に居続けるのは
マズイ。出来れば経営はデキる奴に任せたい。

「ああ、後で直接紹介するよ」

会社の名前は、と少し逡巡するような間を置いてから紫垣が言葉を
継ぐ。

『天童民間警備会社』だ」

第4話 天童民間警備会社

翌日。通学や通勤する人もまばらになってくる程にまで太陽が上る頃、響太郎と夏世は『ハッピービルディング』と書かれた雑居ビルの前に来ていた。

「おい夏世……ここ、本当にあってんだよな」

「私を疑うんですか」

スマートフォンで地図を見ていた夏世がむっとした顔になる。だがそれは仕方のない事でもあった。このビルはあまりにもボロい。その上三階以外のテナント名が臭い。さらに、あるうことが先ほどのビルを二人が見回していた時、それを見た通行人はどこか避けるようにして足早に去っていったのだ。

「オイ、あのオッサン……俺たちを騙しやがったんじゃないだろうな」

「……いえ……まだ実際に部屋を確かめてもいませんから嘘とは……」

響太郎が眉間にしわを寄せて苦い表情をする。民警になって早々わけのわからないオッサンに騙されるのは勘弁だ　　と思ったその時、響太郎は低く唸る車の排気音に気がついた。

「響太郎」

夏世が一言つぶやき、響太郎の着ている制服の裾をちよいちよいと引っ張る。自分らに近づいてくる車はなんとリムジンであり、それは二人が訝しげに見つめているハッピービルディング沿いの路肩に駐車した。後部座席のドアが自動で開き、スーツ姿に明るい雰囲気をもった男が出てくる。　　紛れも無い、あれは紫垣仙一だ。

「やあやあー！　君たち早かったね！　……ああ、まあここが本当に民警の事務所なのかって怪しむのはわからんでもない。とりあえず案内するよ」

そう言って紫垣がさっさとハッピービルディングの階段を上がる。三階のインターホンを鳴らすと間もなく澄んだ声の女性が応対し、彼は中へ入っていく。響太郎と夏世もその後ろに続いた。

中に入ると、外観同様古びた内装の事務所が視界に映り込む。そして、響太郎はその最奥部に座っている黒髪の女性を見つけた。

「木更、彼らが新しい社員の響太郎君と夏世ちゃんだ」

唐突に紹介され一瞬響太郎は焦ったが、隣の夏世は「千寿夏世です」と丁寧にお辞儀をしている。その適応具合に面食らったが、夏世だけが挨拶して自分がしないと云うのもおかしい話なので、夏世同様会釈をしながら奥の女性に自己紹介をする。

「如月響太郎だ」

「私は天童木更。この天童民間警備会社の社長よ。……あら、あなた里見くんと同じ学校なのね」

響太郎の姿を見ながら女性が呟く。はて、里見……？どこかで聞いたよつな……。響太郎の記憶のどこかに、その名前が引っかった。

「おっと、そうだそうだ。蓮太郎たちはまだ来ていないのか？」

「まだ来てないんですね……」

天童木更がため息をつく。一方の響太郎は、その名前を聞いてさらに顔をしかめていた。思い出そうとしていることがあと少しで思い出せそうな時にする顔だ。

響太郎が何かを思い出すまであと一歩、と言ったところで背後の扉が開け放たれ、真っ赤なツインテールを下げて快活さを全身にまとう少女と、響太郎と同じ制服を来た不幸そうな面を引っさげた男が入ってくる。

「木更さん悪い、遅刻した」

「だーかーらー、妾はもっと早く起きろと言ったのだ！」

「しょうがねえだろ、XDのメンテしなくちゃならなかったんだから」

「それで新しく増える仲間との挨拶に遅れてどうするのだ」

「……悪かったよ」

振り返った響太郎と、男の目が合う。そこまでしてようやく響太郎の頭の中にかかっていた靄が晴れた。

「蓮太郎？ お前里見蓮太郎か？」

突然名前を呼ばれた男が眉をひそめる。数秒してひらめいたようにポンと手を打つ。

「響太郎か？ 如月響太郎？」

「ああ、如月響太郎だ！ なんだお前、同じ高校だったのかよ」

蓮太郎と呼ばれた男の表情が若干曇る。

「まあ……俺は行きたくねえんだけどな。事情があって仕方なく行ってんだ」

久方ぶりの対面、と言つのが適切であろう状況に、他四名は取り残されたようにポカンと呆気にとられていた。

「ん？ 蓮太郎、響太郎君とは知り合いだったのか？」

そう言つ紫垣の口ぶりは、どこか親のような印象を抱かせる。

「ああ、小学四年の時にな」

「……紫垣さん、知らなかったんですか？」

木更が立ち上がり、呆れたように言つ。

「最初に紫垣さんから聞いた時は少し心配だったけど……里見くんと知り合いなら、まあ大丈夫そうね」

良い評価なんだよな、それ。響太郎は内心でそうツツコミながら再度蓮太郎を見やる。

「そついえば……お前民警だったのかよ」

「事情があつてな」

「そつか」

一応響太郎も、民警になったことには『理由』がある。他人からすればその理由の根本は突拍子もない事であり、響太郎自身その事を好んで他言するつもりもない。故に蓮太郎の茶を濁すような物言いに、敢えて探りを入れるようなことはしなかった。

「……」

沈黙。既知の仲である二人の会話があっさりと終わってしまったので無理もないことだ。気まずいと言つよりも、なるべくしてなつたと言つべき静寂が訪れ

「響太郎が二人いるみたいですよ」「蓮太郎が二人いるみたいなのだ」

二人の少女が同時に声を発する。静けさの後、と言つことも相まつて、場にクスリと笑いがこぼれる。だが、残念ながら呼ばれた当人は不機嫌そうな顔になっていた。

「不幸そうなところが似ていますね」

夏世がどこか関心したように呟く。……身も蓋も無いイニシエーターで悪いな。

「そういえば、自己紹介をしていなかったのだ。妾は藍原延珠。蓮太郎のイニシエーターだ」

「私は千寿夏世、響太郎のイニシエーターです」

そう言って軽く会釈をしあってから、夏世が響太郎を見上げる。

「響太郎にも友達がいたんですね」

「……失礼な」

急に紫垣が「おっと」と思い出したように腕時計を見て言葉を継ぐ。

「そろそろアポの時間みたいだな。二人の家に後で文書を送って

おくから、欲しい装備があったら言ってくれよ」

「あ、ああ。感謝する」

「ありがとうございます」

チクシヨウ、なんか言葉遣いを誤った気がするぞ。すぐに礼が出てくる夏世に響太郎は少し感心した。

足早に出ていった紫垣を見送ると、後には天童民間警備会社の社員だけが残された。

「あー……そういつわけで、宜しく頼む」

何だかんだでしっかり挨拶をしていなかった木更に礼をする。よし、若干気まずい雰囲気だったが今度こそ普通の挨拶だ。

「宜しく願います。社長」

……しまった、この人社長だった。口を開けば開くほど自分の粗野さが露呈していくようで、響太郎は辟易してきた。口じゃ夏世に勝てないな、うん。

「そうね、よろしく願いますわ。二人共」

木更がその細雪を思わせる白く透明な肌に微笑みを浮かばせる。現代美術家がこの場にいれば、発狂して絵なり彫刻なりにしたがりそうな美しさだ。身にまとっている黒いセーラー服と清流のような流れの黒髪による二重のコントラストが、その美白をより印象づかせている。

「ガストレアが出現次第、二人も現場に急行して頂戴ね。他にもこっちに来た依頼があつたら、それも教えるわ。あと、特に会社として規約とかはないけど……………」

木更が蓮太郎を見据える。細められた目にはどこか恨みが含まれているようで、蓮太郎がバツの悪そうな顔になる。

「他の民警に手柄を取られないようにしてね。最近ホントに厳しいの」

「わかった」

「はい」

経営が厳しいということは残念ながら、既にこの立地が顕著に現している。それに、ガストレアを倒さなければIP序列は上がらない。結局やることは同じ、ガストレアの撃破だ。

その後、それぞれがもう少し詳しい自己紹介と携帯のアドレス交換をして、響太郎と夏世は天童民間警備会社を後にした。

「…………ポテンシャルの高い民警ですね」

夏世が言わんとしていることはそれだけでわかった。これから戦う仲間として三人のことを聞いたのだが、彼らの持っている能力は、あの雑居ビルに置いておくにはもったいない境地に至っていると素人の響太郎にも分かった。

まず主戦闘員でありプロモーターの里見蓮太郎は、天童式戦闘術とやらの初段だという。その戦闘術がどういうものかは知らないが、既に基本的な戦闘力が響太郎とはかけ離れているのは間違いない。

次いで蓮太郎のイニシエーター、藍原延珠。モデル・ラビットであり、その脚力を利用した高速移動と蹴撃技で戦うとのことだ。響太郎のイニシエーターである夏世は戦闘サポート能力に秀でており、直接的な戦闘力は余り持ち合わせていない。よって、響太郎と夏世の役割は蓮太郎と延珠のサポートに回る、と言つのが最も合理的な今後の戦い方として合意した。

さらに詳しくは聞けなかったが、社長の天童木更も天童式抜刀術の免許皆伝とのことで、自分なぞが相対すれば指一本動かす暇もなく負

けるだろうと、響太郎自身は直感で感じていた。ある程度は予測できていたものの、想像以上の実力差に思わず嘆息する。

「……ハア」

「突然不幸を撒き散らさないでください」

「なんでそうなんだ」

「冗談ですよ。……まだ時間はありますから、一歩ずつ進んでいきましょっつ？」

はにかみながら響太郎を見上げて言ったそれは、彼女なりのフオーローなのだろう。少し抽象的な言い方は彼女の見た目と齟齬するが、響太郎にとってその支えは有り難かった。

「……ああ、ありがとな」

「いえ。私はあなたの相棒イニシエーターですから」

そのまま続けようとしていた言葉を無理やり切るようにして突然押し黙る。何事かと思つて夏世を見ると、彼女は前方の何かを見ているようだった。視線を辿るとその先には、珍しく移動式の屋台があった。匂いこそラーメンスープのそれしか響太郎の鼻には匂つてこないのだが、赤い暖簾には息遣いの感じられる白文字の行書で『極みの麵』と書かれている。やはりラーメン屋だろうか。

「……寄っていくか？」

「響太郎なのに気がきますね」

何様だオイ。と喉まで出かけたが飲み込んだ。意外にも夏世は、欲しかった玩具を買ってもらつた子どものように嬉しそうな表情をしている。彼女は基本的に、その表情筋の怠慢に文句を言いたくなる程感情がわかりにくい。そのため響太郎はその面持ちに一驚した。

そのまま二人は吸い込まれるようにして暖簾を上げ、揃つて左端の席に着く。中を一瞥したがメニューは見当たらない。一見さんお断りの店か？という思いが響太郎の胸をよぎつたその時、エラが張り正方形に近い形をした彫りの深い顔の店主が活きのいい声を上げた。

「おつ、らっしやいッ……」
「じいん」若エのがよく来んなあ！なんでもいいぜ、注文しな！」

なんとということだ、喋っている内容まで活きが良い。その活発さは最早スポーツ選手のサポーター顔負けである。若干沈みかけていた響太郎の気分も、その声に釣られて少し上昇気流に乗り出した。

「ああ、そうだな……んじゃ親父、チャーシュー麺頼むわ、チャーシュー厚切りでな」

そういやスープの種類も知らないな、と思ったが響太郎は構わず注文した。ふと左にちよこんと座っている夏世を見ると、夏世は屋台を見回して何故か真剣な顔をしている。響太郎がどうしたのかと問いかけようとしたその寸前、夏世が口を開いた。

「温素麺」

「は」

「あいよっ…」

ちょっと待てここラーメン屋だろ。いや確かに店名にラーメンとか書いてねえけど普通「あいよっ！」って待てやオイ親父も元気に承ってんじゃねえスツ飛ばすぞコラ。

「……？ どうしたんですか響太郎、怒ってるのか戸惑ってるのかハッキリしてください」

どうやら夏世は響太郎の表情をそう見てとっいたらしい。……いや、無茶言うな大体なんでお前は素麺なんだどこにそんな要素がこの店にオイオイ親父その鍋で茹でてる素麺はどっから出てきた。

うっかり頭を抱えかける。……ここで頭を抱えるのはダサイ、とてつもなくダサイ。どうやらこの状況が飲み込めていないのは俺だけらしい。なんだ？ 最近の屋台には素麺置くのが当たり前なのかよ。もうダメだ。考えるのをやめよう。

響太郎が思考を諦めて呆けていると、不意に陶器と木製の卓がぶつかる音が聞こえる。ハツと視線を下に落とすと、一センチほどあるう厚切りのチャーシューが三枚も乗ったラーメンが視界の八割を占拠した。匂いで空腹感が増した今、このラーメンが食べられないものであったなら視界の不法占拠だと憤慨したに違いない。その丼を眺めると、下方に広がる茶色から、醤油ベースのスープだと判断できた。その上を漂う背脂は多すぎず、間に挟まる麺の黄色がはっきりと見て

取れる。ギュツと凝縮され、芯を感じられるその麺は細麺、茹で上がりも完璧だ。最上部に菓食う具材はチャーシュー、刻みネギ、シナチク。その太さに加え軽く見積もっても直径二センチはあるハツキリとした色の大型チャーシュー二枚に目を取られがちだが、丁寧な包丁さばきを感じられる等間隔に刻まれたネギに加え、流通品によく見られる萎えて柔らかいモノではなく一本一本を丹念に漬け込んだ自家製と思われるシナチクも、少し家庭料理の腕に覚えがある程度の響太郎から見ても圧巻の出来だった。

「すげえ」

思わず率直な感想が漏れた。それを聞いた店主が、ニツとその肉食動物的な白い歯を見せる。

「おつ、お前さんウチの麺の良さが分かんのか。最近の若エもんにはよく驚かされるぜ、ハツハツハツ！」

「……ん？」こじには若い奴らが結構来るのか」

夏世に言われなければその佇まいに圧倒されて立ち寄ることもなかっただろう。この店にはそういった敵とした雰囲気がある。

「いや、基本的に食通かその似非野郎しか来ねエんだがな」

「だよな」

「この前来た若エカップル共はなかなか面白かったなア。最初に来た奴らは女の方が凄くてな、ここを見つけるやいなやズカズカと入ってきて開口一番『素麺二つ！』なんて言いやがったんだ。なかなか見る目のある奴だったぜ」

まあ、遅れて入ってきた民警みたいな男は「なんで素麺なんだ」って呆れてたがな、と笑いながら続ける。

「……変わった奴もいるもんだな」

「次に来た奴も面白かったぜ？ 男の方はまあなんていうか男ウケしそうな奴だったけど、これもまた女の方がな。入ってくるなり『ご飯大ください！』なんて言うんだからコリヤ驚きだ。暖簾見てんのかってなア」

ガハハ、と景気良く店主が笑い声を上げる。この店の客層はどうなってるんだオイ。

響太郎が呆れたところですから、と何かを啜る音が耳に入ってきたので隣を見ると、夏世がこれまた美味しそうに温素麵を啜っていた。「なんだこりゃ」

夏世が啜っているものこそ白磁のように艶の良い素麵だ。まあそれにもある意味驚きだ、しかしそれより俺が驚いたのは

「親父、なんだこの汁」

一見すき焼きのようにも見える。だがその汁はやけに脂が多いわりにクドそうに見えず、その肉も牛にしては色が黒く見える。

「たまげたなあ……お前さん、見る目あんど。これは熊汁だ」

「はっ?」

「熊肉は旨味が強くてなあ。郷土料理で熊肉料理があることア知ってっか?」

「ああ。北海道なんか熊料理店がいくつもあるって聞いてるし、マタギ料理でも使われてんだろ」

「そのとおりだ。この熊肉ってのは少量の肉でも強い旨味が出る上に、寒冷地の熊に至っては脂身が多くせにその味はサラっとしてやがんだ」

それを聞いてもしゃ、と思い響太郎はスープを一口飲んでみる。

「……「うちにも?」

「「名答、「このラーメンの隠し味は熊なんよ。信頼できる猟師からしか仕入れてねエから出せる量が限られてんだけどな。……ホントは熊掌を使った料理も出してやりてえんだが、あいにく中国の知り合いが先のガストレア大戦で死んじまってな。狩場もほとんどねえんだ」

「熊掌使った料理か……」

「代表的なのは紅焼熊掌だな。本州のツキノワグマは小さすぎて熊掌の材料に向かねえんだよ」

「とっととガストレアなんぞ全滅して欲しいもんだな」

「……そうだな」

言うてから、後悔した。響太郎は不可解なことだが二つの世界の記憶がある故に、この世界の現実を軽んじた。だが店主の年齢は見るか

らに『奪われた世代』だ。ガストレアの圧倒的な力を目前にしただろう。奴らに大切な人を奪われただろう。……その苦痛はこちらの世界の響太郎の記憶にも強く刻み込まれている。忸怩たる思いに駆られ、結局黙ってラーメンを啜ることにした。

「これ、美味しいです」

響太郎が何口か進んだ頃、夏世が満足そうな声でそう言った。よく見ると素麺は無くなっていくが、汁や具はまだ大分残っている。その上夏世の表情はどこか物欲しそうだ。

「よっし、合格だ嬢ちゃん！ 大抵の奴らはこんだけで満足しちゃもうんだがなア、特別にこの裏メニュー『くま素麺』の更に裏メニューを食わしてやる！」

思わず夏世の顔を覗きこむと、「してやったり」と言わんばかりにほくそ笑んだ顔をしている。お前そんなに表情豊かだったか？

響太郎も再度ラーメンを啜る。改めて意識しながら食べると、熊肉特有の臭みを感じられない。それは仕入元の猟師の腕の良さを暗示している。ふわりと感じられる味噌の風味は熊肉の臭い消しの際に使われたものだろうか、ついでに麺に絡んだスープから伝わるピリリとした辛さがさらに食欲をそそる。

これまで食べたことのない味に舌鼓を打っていると、隣にゴトンと井が置かれた。店主は自慢げな顔をしている。

『くま雑炊』だ」

「もう何も言わん」

「……ちよつと味が変わってる」

「良い舌してるぜ嬢ちゃん」

ラーメン井と同じ唐草模様が模られた陶器製の散蓮華で雑炊を掬う夏世。何気なく使っていたが、チェーン店などでよく見られるラーメン用に作られた欠き付きのプラスチック製蓮華と違う辺りで、この店主のこだわりが感じられる。

どこまでも変わった店に響太郎が圧倒されていると突然、外で声が聞こえた。

「蓮太郎蓮太郎、今日ならきつと『裏めにゅー』があるのだ！」

「あのなあ……俺今そんな金、ってちよつと待て何勝手に入ってたやがんだー！」

男の声が喋り終わる前に暖簾が捲られ、真っ先に目に入ったのは頭から生える二本の赤い耳……ではなくツインテールだった。

「あ、お前」

「お、響太郎と夏世ではないかー！」

「延珠？」

「こんなところで会うとは偶然なのだ！」

「延珠、もしかしてこの店に来たことがあるんですか？」

「無論だ。その時は『裏めにゅー』とやらを出せと言ったのだが、断られてしまった。ってそれは?!」

延珠が夏世の食べている雑炊を見て目を丸くし、直後店主を見上げる。

「さては……これが『裏めにゅー』なのだな?！」

「運がいいな赤髪の嬢ちゃん。なら折角だ、今日はこの裏メニュー『くま雑炊』を食ってきなー！」

そう言って店主が準備していたように丼を取り出して延珠の前に置く。ん？準備していたように……って、それもいや俺に出してくれるはずのだったんじゃない……？

響太郎が悔しさを顔に現す直前、のろりと暖簾が捲られてこれまた不幸を顔に塗りたくったような顔の男　里見蓮太郎が入ってきた。

「延珠、今俺そんなに手持ちがねえから帰る　ってオイなんでもう食ってんだー！」

蓮太郎が頭を抱えるが、その後すぐに諦めたように延珠の右の席に着く。

「……親父、小ラーメン一つくれ、麺固めで」

「あいよ」

そこで店内を見渡した蓮太郎は、新しく天童民間警備会社の社員になった二人によろやく気がついた。

「お前らも来てたのか」

「ああ、夏世が行きたいってな」

くま雑炊をふーふーと冷ましながら景気良く食べる延珠を挟んで会話する。

「そついや響太郎、紫垣さんと知り合いだったのかよ」

「いや…… 民警になってすぐ知り合ったんだ。ってか、たまたま俺たちが外周区で倒したガストレアの近くにいたんだけどな」

蓮太郎が一瞬不可解そうな顔になったが、間もなく取り直す。

「そつか…… その流れで紫垣さんが後援者パトロンに？」

「ああ。よくはわかんねえけど、俺みたいな年齢の民警が物珍しかったんじゃないか？」

「俺たちの後見人にもなってくれてっからな、あの人は」

蓮太郎が感謝しているような声で言う。紫垣仙一という男は変わった子どもばかり目にかけるな、と余り詰まっていない頭で響太郎は思った。

「ラーメン一丁お待ちっ！」

「……んっ」

蓮太郎が目の前に置かれた丼を見て疑問符を立てる。それも当然のことだ。なぜなら

「親父、俺小ラーメン頼んだがな」

「サービスだよ、サービスッ！ 辛気くせえ顔してやがるからな、旨いモンでも食って気イ紛らわせな！」

「……ありがとう」

「なに、良いつてコトよ。俺なんぞアンタら民警がいなけりゃ、こんなトコでのこのつと商売なんざしてらんねえんだからよ。そついう奴らに感謝の念を示すつてのは、人としてたりめエのコトよ」

「うむー！ 東京エリアは妾たちが守つておるのだから心配ないのだ」

「ハッハ、そりゃ頼もしいなア嬢ちゃん！」

店主がよく通る声で笑いながら、わしゃわしゃとゴツイ手で延珠の髪を撫でる。見かけはただの頑固親父のくせして意外と民警に理解があるんだな。ひょっとして、夏世たちと似た年齢の子どもでもいた

んじゃねえのか？横目にその会話を捉えながら響太郎はふとそう思う。我ながら悲しい癖だ。そんな事を詮索したところで、何も解決しないじゃねえか。深読みしようとして、結局何もわからずじまいなら、最初から考えねえ方がマシなんだ。

「旨かったぜ、うちそうめん」

陰鬱な思考を消し飛ばすようにスープを一気に飲み干し、わざと明るい声ではつきり言い放つ。すると、響太郎と蓮太郎の間に小皿が置かれる。

「ホレ、民警の兄ちゃんたちにオマケだぜ」

「……寿司か？」

蓮太郎が訝しげな目つきで言う。水分を程よく含んで艶やかな光を放つシャリの尾根で存在感を放っているネタは　なんと肉だった。さつと炙ったたであるうそれには、周りにほんのりとした焼き色があるがその中は脂がしっとりとし落ち着いた光沢を放っている。上に付けられている練りワサビとのハーモニーは、想像するだけで口の中に涎が勝手に溢れ出す。

「良いのかよ？」

「まあこれも何かの縁だ、嬢ちゃんたちにも裏メニューを出したからな。ここでアンタらに出さなけりゃ不平等ってもんよ」

響太郎の問いかけに嬉しい回答を返す店主にありがたさを感じつつ、響太郎は寿司を半分食べる。

「……旨えな、こりゃ」

「たりめーだ、こいつア今やめったに手に入らねえ熊野牛のロースを使った炙り握りよオ！　この肉の霜降りのきめ細やかさと来たら、三大和牛にだって引けを取らねえぜ」

「熊野牛ってどこの肉なんだ？」

「和歌山だ」

「……大阪エリアか？」

「ああ、向こうの連中がなんとかして種を守ってくれたみたいでなア。絶対数が少ないもんで、俺が気に入った奴にしか出さねエけどな！　ハハハッ！」

最も、どの和牛も今じゃほとんど手に入らないんだがな、と少々自嘲気味に続けた。料理人にとって、その生命線とも言える食材が入手できなくなると言うのは、包丁を扱う腕が干切れるのと同じくらい辛いことだ。この店主もガストレア大戦以降、高騰する食材に苦勞してきただろう。その苦勞を乗り越えて今があるのだ。響太郎はそのことを噛み締めながら、口の中で許可も無くとりけたネタと、一粒一粒に生命が宿っていると言っても過言ではないほどの甘みを含んだシャリを堪能した。こんな旨い寿司を食ったのはいつぶりだろう。五年ぶりくらいか？ いやもつとか。ガストレア大戦集結から数年は、まともな飯なんて食えなかったんだ。……もう一つの世界の記憶については、考えないことにした。

「……なんだ」

視線を感じて左を見ると、くま雑炊を米一粒も残さず綺麗に食べた夏世が上目遣いで俺を見ていた。……なんだ、そんな顔をして何が望みだ。いや綺麗なのは食べきられたその器であって決してお前の顔のことじゃねえぞ。クソ、自分で思って恥ずかしくなってきたどうしてくれんだチクショウ。

「おいしいですか」

一言で全てを察した。

「……やるよ」

「えへへ」

真顔が一瞬で緩み、嬉しそうな顔をする夏世。これだけで、響太郎は自分の判断が間違っていないと思えた。

「おいしいです」

「ハッハ！ そいつア良かった！ 嬢ちゃん今後が期待できるなア」

「響太郎にだけ全部食べられてしまうところでした」

「……お前裏メニユー一人で平らげたじゃねえか」

「響太郎もラーメン全部食べたんですから、麺類同士ということでおあいこです」

「わけがわからん……」

「あっ！ オイ延珠！」

「おいしいのだ！」

やかましい方向を見ると、延珠が握り寿司にかぶりついていた。ちゃんと半分しか食べていない辺りが優しさか。だが蓮太郎は悔しそうだった。井はいつの間にか空っぽだ。

「蓮太郎も食べるのだ。はい、あーん」

「や、やらねえよ」

蓮太郎が左手でガードを作る。そして差し出された寿司を右手で素早くかつさらい、頬張った。

「ん、ーりゃ確かに言え……」

蓮太郎が目を丸くしている。そりゃまあこれだけ旨けりゃ目も丸くなるってもんだ。

……。

そこまでして非常に深刻な問題に気づき、俺と蓮太郎の顔が同時に青くなった。

「これいくらだッ?!」

切羽詰まった言い方には余裕もプライドも何一つないが、重要だ、これは。自分で言うのも悲しい話だが、今のこの爪に火を灯すような生活で、この料理たちはヤバイ。兎にも角にもヤバイ。

「ハハッ、気にすんな、出世払いで返しな！　今回はサービスで、一品一律八百円だ！」

「はっぴやくウツ?!」

ゼロがひとつ足らねえんじゃねえのかソレ。赤字とかそういうレベルじゃねえぞ！

「マジで良いのか……?」

蓮太郎がほっとしたような、心配するような声になる。なんだその極貧生活送ってますみたいな口ぶりは……。最も、生活水準については俺も人のこと言えないが。

「ああ。勿論だ、お前さん方は気に入ったからな。金が入った時にゃ、ドーンと頼むぜ?」

「感謝するぜ……」

「サンキューな……」

貧乏同士、肩の荷が降りたような安心した声が漏れた。

「毎度ありーッー」

四人は揃って満足気な表情で屋台を後にした。……内、男二人は少し厳しい顔をしているが。

「二千四百円が……」

「お前もキツイのか」

「キツイどころの騒ぎじゃねえ……」

「確か延珠も社員として給料もらってたんだよな、だったら」

言いかけて響太郎は口をつぐんだ。蓮太郎の顔から血の気が引いている。パンドラの箱を開けるところかプレス機にでもかけられたような表情だ。この箱ってぶち壊していいのかわからないが今は大した問題ではない。

「前……アイツに金を借りたことがあってな……その時アイツと先生がデタラメを好き放題言いふらしやがってな……それからは何があっても借りないことにしてんだ」

「よくわからんが大変だな……」

事情が全く分からないが、同情せざるを得ない顔つきだ。先生とは誰だなどと聞くのは今の蓮太郎にとって、傷口に塩を塗りこむどころか体ごと海水に沈める行為じゃないだろうか。

「まあ何にしる蓮太郎、お前と同じ民警で少し助かったぜ。最低でも足手まといにはならないようにするよ」

「お前そう言いながら、なんだかんだでいつも卒なくこなしてたじゃねえか」

「ハハッ、ありがとな」

「まあ、よろしく頼むぜ」

「じつち」そよしくな

太陽は傾き始めている。この後どうすっかな、学校はそろそろ終わるだろうし、どのみち面倒だから行く気にならねえ。……ちよっと早いが、夕飯の仕込みでもするか。

そつこつ考えている内に、響太郎は周囲の風景が自宅近くのものに

なっていることに気づいた。

「あ、俺「うちだから」

「おう。またな」

「ああ」

久々に出会った友人に本日二度目の別れを告げる。二人の少女は数メートル先できゃっきゃと話していたが、夏世が自宅近いことに気づいたようで、延珠に「またね」と言っていた。

蓮太郎と延珠と別れ、二人は自宅のアパートへと進んでいた。

「響太郎」

「どうした」

「優しい人たちで、良かったです」

「……そうだな」

天童民間警備会社には不可解な点が少しある。だが、それを鑑みてもあの民警の社員は 仲間信頼できる人たちだ。それに加え響太郎は、夏世が自分と同じことを思っていたことに少し嬉しさを感じた。

「これから大変なこともあるかもしれないが、頑張っていこうぜ」

「全くです。足を引つ張らないでくださいね」

「ひねくれてんなお前……」

ハア、と呆れたため息が漏れる。どうしてコイツはこう素直によろしくと言えないんだ。

突然夏世がたたと響太郎の前に躍り出る。

「私がしっかりサポートしますから、安心してくださいね？ あなたがいなくなったら……その、私はさみしいです」

後ろ手に組み、上目遣いで少々恥じらいながら言う夏世。その可愛さというか色っぽさは、ガストレアの浸食を受けつつもそれに成り果ててしまうことを拒み、人間であり続けているからこそ成せるものだろうか？ 口に出さない問いに答えはもらえない。代わりに響太郎は言った。

「ああ。改めて、よろしく頼むぜ。俺だってお前がいなくなったら寂

しんだからよ」

穏やかに笑いあう。

そして、彼らは二人を待つ空っぽのアパートに帰っていった。

第5話 お前は誰だ

「お兄ちゃん」「響太郎」「響くん」

またかッ

幸せな家庭、幸せな交友関係、幸せな……世界。

なんなんだよ、これはッ。今の俺は　もうそっちの人間じゃねえんだよ。一々出てくるんじゃないやねえよ。……チクシヨウ。

「　郎ッ」

「ッ」

誰の声だ。話しかけないでくれ……、俺は……俺は……。

「響太郎ッ」

その声で、意識が“現実”に引き戻される。ハハッ、やつぱ、そうだよな。こっちが……このクソツタれた世界が、今の……いや、『俺』自身の、現実なんだ。

雀の鳴き声が耳に入る。朝か。学校……面倒くせえなあ……。

「……夏世、か」

布団の上で目を閉じたまま、声の主であろう相手に語りかける。俺は今、どんな声をしているだろうか？　問うまでもないか。俺は

「大丈夫、ですか」

「ちえっ……そんなにかよ」

少しばかり自分が嫌になった。

「そんなに、つらそうにしないで」

「悪い」

夏世の声は、いつもの毒舌からは想像できない、今にも深淵へ消え入ってしまいそうな声だった。　お前、俺の痛みまで抱えようとなんてしないでいいんだぜ。

「よっし、んじゃ起きるか」

ウジウジしてたって何も始まりやしねえんだ。だったら、前を向くのが一番じゃないか？

気合を入れるために伸びでもしよう。目を開けるのは、気持ち入れ

替えてからで良いか？ 相棒。

「ひゃう……」

オイ待てや。なんだ今のえろ……ステイ、じゃないストップ、なんだ今の何かを堪えるような……恥ずかしがるような恥じらうような可愛げな声は。てか、恥ずかしがるのと恥じらうのってどう違うんだ？ 全然違う気がするが具体的な差異を問われると って、今はそんなトーストの焼き加減論争くらいどうでもいいことを考えている場合じゃねえ。あ、ちなみに俺は中のモチモチ感がバツチリ残ってるレベルの、浅い焼き加減が好きだぞ。確か夏世も俺と同じで あっ夏世。

恐る恐る右目から開いてみる。直後、後悔した。どうして俺は伸びをしたまま 正確には両手が何かに触れているまま それを確認しちまったんだ。

「……ばか……」

ウムム、ばつちり触れていますね。胸に。まあ正直コイツの胸は『これ凄いまな板だよ！』とかTOK Oが見たら絶対言っちゃう程度だけどさ。そういう問題じゃないんだよね、これ。大体なんでキミは恥ずかしがってたんだよ。これじゃ俺性犯罪者のソレじゃん。

試しに全体を撫でてみようかと言つ非常にまずい(法的な意味で)欲望に駆られてしまったが、俺の理性は強いぜ？ その位の感情には左右されねえよ。

「ひあっ?! きよ、響太郎のばかつ」

Oh, my good · My hands なぜ勝手に動いた。夏世ドン引きじゃん。

「いや、その……すまん」

え？ 待て待て、さすがの俺でもグへへまでは言わなかったから！ そこまで言つと某脳内選択肢の野郎じゃなきゃ言い訳できないから！ いやそもそも言つ気ないからね。いやマジで。

なんだよ畜生、今朝の感情やけに変遷激しいなオイ、思春期かよ。あ、思春期だわ(笑)

「も、もう……すごく悲しそうにしてたから、心配したのに……私の無駄にした心配返してくださいっ」

一歩後ずさり、夏世が頬をふくらませながら憤っている。……のだが！ 両手で胸を隠しているのと顔が紅潮しているという二つが合わさるとシヨック・ルーラーがエクシーズ召喚……違う違う、あのファッキン野郎じゃない、……とにかく、本人は怒っているつもりなのだろうが　むしろそれすら合わせても良いだろう　ポーズと表情のせいですごく可愛い。

「って違えよ！　もうダメじゃん俺！」

流石にこれ以上の思考はまずいだろ。今度こそ本気で気を取り直して、夏世に向き直る。

思い詰められた思考を追いやるためにオカシな行動を取ってしまったことは、流石に謝らないとな。

「ごめんな、夏世。心配かけた」

「あう、突然そんな真顔になられると困ります」

響太郎の行動の変遷に、夏世が少しばかり当惑する。しかし、こいつ最初に会った時より大分表情が柔らかくなった気がするな。

「そんなにジロジロ見て、またセクハラですか」

……前言撤回しようかなあ。

「違えよ。今日のお前、ずいぶんと感情豊かだなと思ってな」

「ばかですか……突然同居している人からセクハラされて無反応のほうがおかしいです」

「……一理あるな」

「とりあえず、響太郎は今日学校でしょう？　さっさと行ってくださいっ」

「行くのかよ面倒だなあ……」

心底嫌だと言わんばかりの声質だ。これが“普通”の世界だったら尻を叩かれてでも行かされたかもしれないが、生憎ココはそんな“日常”が通じる世界じゃない。それぞれが関わることで無く生きていた頃　違う世界の記憶同士が混ざり合う前　はダラダラとこの非日常を受け入れていた。だが……ガストレアのいない世界を、俺は

知ってる。今のままで……俺は良いのか？

「猿の脳漿を砕いて出汁を取った後の、残りカスを天日干ししたみたいなその脳みそで何を考えてるか知りませんが、早くご飯食べてください」

「それじゃ干物以下ダルオオ!? ……まあいいや、すぐ行くよ」

なんかホ ビの人(曖昧)みたいになっちまったゾ。……ああクソ、何考えてたかすっぽり抜けた。とりあえず着替えて飯食おう。

「本当に……大丈夫……かな」

響太郎がのろのろと着替えていることを確認した夏世は、彼に聞かえないように呟く。声を出さずには、いられなかった。このまま自分の中に収めているだけでは、止め処もない負の思考に頭がやられてしまいそうだった。

私が響太郎のイニシエーターになって、二週間近くが経つ。起きている間、響太郎は普通にしているけれど、それが「努力」して作っている仮面であることが、ここ数日でわかってきた。……この間、眠っている時 正確には夢を視ている時だろうけれど 彼はすごく苦しそうにしていることに気がついたから。ここじゃない』どこか』を拒絶しているような……寧ろ、その『どこか』への憧憬を無理やり掻き消そうとしているような。それでもソレは、ただの妄想だとは思えない。知能指数が210だと診断を受けた夏世の頭脳を持ってしても、響太郎の苦しみの原因は推し量り損ねていた。

「私……響太郎に信頼されていないんでしょうか」

少々感傷的になってきた彼女の鼻孔を、トーストの香ばしさがくすぐる。その香りが、尚の事彼女の感傷を促進してしまう。

そう、これまでも家事を手伝ってこそいたが、料理は何だかんだ言って響太郎に任せていた。料理をすること二人の信頼に明確な因果関係は無い、と断言できる。だが、それでも夏世には苦しむ響太郎のためにしてあげられることは、この程度の事しか思いつくことが出来なかった。自分の知能指数はなんの為にあるのだ。いついつ時、大切な人を導いてあげるためにあるのではないのか？ 自分の無能

さっ　腹が立つ。

「お、今日はパンかー」

パジャマから制服に着替え終わった響太郎は欠伸をしながら朝食の置かれたちゃぶ台へと向かう。

「と言っか、わざわざ飯作ってくれたんだな」

「いえ……いつもご飯は響太郎任せでしたから。たまには私の甘美なる料理センスに酔いしれてもらっても良いかな、と思っただけです」
「なんじゃそりゃ……」

適当なごとはかりすらすらと出てくるな……と思ったが、どう転んでも今夏世は自分の本音を話せるとは考えられなかった。

「ところで夏世さん」

「美味しくないですか？」

「まだ食ってねえよ！　食う前におくべき質問だよー」

「仕方ないですね、聞いてあげましょう」

「なんで胸張ってんだオマエ……まあいいや。このトースト、何が乗ってた？」

「もやしですが」

「Oh」

あれ……おかしいな、普通トーストにもやしって乗せくない？

水っぽくない？　いいの？　「んね？」

「無駄にネイティブっぽく言わないでください気色悪い。中国系アメリカ国籍の方々に対して、頭蓋が割れるまで土下座しますか？」

「怖ッ！　割れたら脳みそ出ちまっよ嫌だよー」

「ボールの端でカンと叩けば綺麗に割れますよ」

「生卵かよー」

「響太郎の脳みそは干物でしょう」

「そのネタまだ引っ張んのかよー」

なんだ……今日の夏世やけに毒舌……いやコレただの悪口だな、どう見ても。

諦めて、トーストを見る。待て待て、決して口で夏世に勝てる気がしないからとかそっぴい意味じゃないぞ？　……すみません嘘つき

ました。あつそこホモは嘘つき(迫真)とか言つのやめてくれる？

俺ノンケだから(迫真)

「何気持ち悪い顔してますか。ホモですか」

「ESPテスト満点差し上げます！」

「もう取ってますよ」

「ウツソダルオオ!？」

「嘘です」

「なんなんだオマエ！」

「己の喘鳴を聞いて、響太郎はさらに呆れた。

朝っぱらから少女と話して、疲れて肩で息してる高校二年生ってどうなんだよ。……ん？ この文じゃ俺ただの性犯罪者じゃねえかクソ。

「と」ろでこのトーストですが」

「さらっと話戻すんかい！」

「……干物の続き話しましょうか？」

「結構です続けて頂いて構いませんむしろ続けてください」

「これ以上俺の精神いぢめないで！」

「仕方ないですね。……で、このトーストですが。結論から言つとツナは偉大でした」

「非常に残念なことに、俺の脳では理解しかねた」

「まあ食べてみてください」

「このもやしトースト……いや、ツナもやしトーストか？ この際どうしてツナトーストにしなかったのかは聞くまい。でも夏世さん、ツナって高いんですよ。万能材料なのは認めるけどさ、これ高いんですよ。」

「安心してください？ このツナは誤発注で大量入荷してしまったものが安売りされていたものですから」

「……ならいいか」

読心術、信じかけています。俺。

危ない新興宗教への架け橋になりかねない思いを払拭して、改めてトーストを見る。

フム、一見トーストからただもやしがはみ出ているように見えるが、その実しっかり調理がされているようだ。具材でよく見えないが、軽めのトーストの全体には綺麗にマーガリンが塗ってあるようだ。パンの端側をバターナイフで穴を開けてしまったりせず、尚且つ均等に塗られている辺り、夏世の性格が垣間見られるというものか。……さて、問題は具材である。あ、このもやし卵とじにしてあるぞ。ってコイツ溶き卵上手すぎるだろ。もやしが変な黄色になっているかと思ったら、上手いこと溶き卵がもやしに絡んでやがるのか。……こんな芸当一朝一夕で身につくようなものじゃないと思うけどな。しかも、ただのもやし卵とじじゃなくて、ツナが綺麗に絡んでいる。ツナ缶のツナは油っぽいので、油切りをせずに使うのは、こういうった具材として使用する場合あまりオススメはできない。それを知ってか、このツナは見たところ丁寧に油切りがされているようだ。しかし……

「どうしたんですか？」

キッチンを眺めていた響太郎の疑問に気がついたのだろうか、夏世が続ける。

「調理はツナ缶の油でやりましたよ」

「合格どころか満点」

「やったあ」

「素直に喜んだ……だと……？」

顔を一瞬で綻ばせてえへへ、喜ぶ夏世に響太郎は面食らった。……

いつも表情薄いくせに、「こうやって時々可愛い表情みせるのがセコいんだよなあ。」

「さて、じゃあ頂くとするか」

響太郎は別に神道の崇拜者であると言っわけではないのだが、最早情性と化した動きで「いただきます」をし、トーストを頬張る。

「んむ。………」

なんだこれ！ マーガリンを塗ったトーストと絶妙なハーモニーを奏でるツナと、その旨味をたっぷり吸い込んだ卵も、勿論のこと旨い。だが………「このもやしシャキシャキだよ！ すげえシャキ

シャキだよー！このアクセントむしろ良いよー！

「美味しいですか？」

若干だが不安そうな色を見せる夏世。これは全力で旨いと伝えねばなるまい。

「マジで旨い！ ツナもそうだがめちゃヤベエ！ コイツこんな安価なくせして、万能材料の仲間入りできるぞー！」

「そ、そんなに美味しいですか」

「おっ、これは旨いわ。もう嫁に出れるレベル」

「お、およめさん……っ」

夏世の紅潮が、沸騰するようにして瞬時に頭まで昇る。ちゃぶ台を介して目の前に座る響太郎に、自分を見られないように「あっ……」などと呟きながら両手で顔を覆うものの、肝心の響太郎は「旨い旨い」と満面の笑みを湛えてトーストを貪り食っているの、逆に興ざめだった。

「……………鈍感とかいう話じゃなくて、これはただのばかですね」

「んあ？ どうした？ 要らないなら貰うぞ。嘘だけど」

「……………響太郎はそのままでもいいです」

「お前はあんまり背負いこむなよな」

何気なく返答したつもりだったが、それを聞いた夏世の表情が一瞬陰ったのを響太郎は見逃せなかった。

「いや……………なんでもねえよ」

「……………そう、ですか」

「話したくなったら話せば良いんだ」

「それも、そうですね」

じゃあ私に、あなたの悩みはまだ聞かせてくれないの？ それはずこしだけ寂しい気もするけれど……………。それはきっと、私を信用してくれていて……………自分の中で整理が付くまで、私なら待ってくれるって、そう思っているから？……………問いかけは言葉にならず、空を震わさない。私、思ったより嫌な子なのかもしれない……………。

「響太郎、スープも作ったんですよ」

「おっ、どんなんだ？」

動いても、動かずとも深みに嵌っていく黒い思考は、無かったことにするのが一番都合がいい。

「硬くなりかけていたフランスパンと、賞味期限があぶないチーズと玉ねぎの処理も兼ねました」

「ちょっと言葉余計だと思っただよね。うん」

夏世が立ち上がり、とてて、と可愛らしくキッチンへ駆けていく。越してきた時に意気がって買った方がいいものの、バイトに明け暮れていたせいでそれこそトースト程度にしか使う機会のなかったオーブントースターが開かれる。中からはこちらもまた使う機会が殆ど無かった耐熱容器が顔を出した。

「何作っただ？」

「聞いて驚きましよう。グラタンスープです」

なんだ驚きましようって。……まあ確かに、ちょっと驚いたけどな。

そう言っただけで彼女が盆に乗せて運んできた二つの器を覗く。すると、とろけた玉ねぎがぎっしりと詰まったスープの上に、スライスされほとんどよく焦げ目の付いたフランスパンが鎮座している。見ているだけで充分美味しいのだが、残念なことにそれでは腹が膨れない。響太郎は仕方なくスプーンでスープを掬って口に運ぶ。

「……………!？」

「美味しいでしよう」

自慢気だ！ 自慢気だぞこの幼女！ ……だが……………確かに、美

味……………。

じっくりと弱火で煮込んだと思われる玉ねぎは形を残しているモノの方が少ないのではないか。それ故に、スープには玉ねぎ特有の甘みが浸透しきっている。その上、この食欲をそそる吸い物みtainな風味は……………？

「白だしかー！」

「正解です。市販のものを買ったのは出費が高むので、おすそ分けしていただいた昆布を使って今朝自作しました」

「お前今日何時に起きたんだよ……………」

「……まあ？」

「そことぼけるのかよー」

可愛らしく　どつみてもわざとらしい　小首を傾げてみせる
夏世を尻目に、響太郎はもう一口を啜る。……玉ねぎの甘みを基調と
しているものの、それ単体だと行き着いてしまいがちな味の平坦さ
に、白だしのほのかな風味が起伏を作っている。ひと通りスープを楽
しんだところで、ずっしりと浮いているフランスパンを齧る。

「うまー」

「余り放っておくとリスでも齧れなくなってしまいますからね」

なぜか呆れた様子で夏世が言い放つ。……いやいや、俺だってフラ
ンスパンの調理はそろそろしようと思ってた頃だからな?!　ブルス
ケッタやトーストはもちろん、サンドイッチやフレンチトーストに
だって使える良い子なんだぞフランスパン!

「お、チーズ」

フランスパンの焦げ目かと思ったが、どうやらパンの上に乗せられ
たチーズが溶け、それに付いた焦げ目もあるようだ。

スープの上品さを上手く取り込みつつも、軽くトーストされたフラ
ンスパンと溶けたチーズのインパクトは……まさにグラタンスープ。
普通に作るなら、もっと手間がかかるはずだが、夏世はそれを文字通
り朝飯前にやってのけたのだ。料理にはそこそこうるさい響太郎も、
この朝食は普通に賞賛を贈ろうと思える。

「……ありがとな、夏世。マジで美味い」

「このくらい朝飯前です」

「これから毎朝作ってくれねえかなあ」

あ、しまった。ウツカリ本音出た。

「いいですよ」

「マジ？」

「毎日このままで凝ったものは作れませんがね」

「いやいや、いいよ。せめて日替わりにしよつぜ」

女の子の手料理が毎朝食べられるというのはこの上ない幸せでは
ないか。……とはいえ、こんな幼い娘に毎朝作らせるといっつのは、さ

さすがに良心の呵責を感じざるを得ない。

「……わかりました。じゃあ明日は響太郎ですね」

「おう」

「それより響太郎、遅刻しますよ」

「……ゲ」

始業、十分前。さようなら、俺の無遅刻登校歴。あ、もう無断欠席が山のようにあるから関係ないか。

「行ってくるッ！」

「行ってらっしゃい」

柔らかく微笑みながら右手を振る夏世を視界の隅に残しながら、玄関の扉を勢い良く開け放つ。扉が閉まると同時に夏世が見えなくなってしまう事が、少しばかり感傷的な出来事に思える。……いやいや、遅刻の言い訳づくりには気持ち悪いぞこれは。

己の変態的思考を払いつつ、置場から自分の自転車を引き出す。もう遅刻確定だし、ゆっくり行って良いよな……。若干登校のやる気を無くしながら、自転車に乗ろうとした瞬間

突如、左側から叩きつけられるような重い衝撃が前輪のハブを襲い、ハンドルが暴れて響太郎の手から無理やりに逃れる。

「ッ!?!」

反射的に左へ顔を向ける。やけに大きなアイアンサイトに加えて消音器付きの拳銃を構え、飄々とした雰囲気を全身に纏った青年が立っていた。距離は三十メートルと言ったところか？ 俺は、気が付かなかったのかッ。

「あっはは、いやいや。あの人^{イレギュラー}が、存在しない者^{イレギュラー}だなんて言うもんだから、どんなものか試してみようと思っ^てねえ」

雰囲気同様、その飄々とした口ぶりはナンパでもしているかのようで、高く澄んだ声をしている。男は、拳銃を右手の人差し指でオモチャを扱うかのごとく回転させながら響太郎に近づきつつ、一方的に話を続ける。

「てか、元々キミに会うつもりとか無かったんだよね。蛭子先輩どこ居ったんだよって感じ」

「デメエ……誰だッ」

「それはコツチの台詞だよ？ 君は、一体誰なんだい？」

「何ワケのわかんねえこと言ってるやがるッ」

発言と同時に右手を後ろに回し、本来『そこ』にあるはずのモノを触るつとする。

「ッ」

しまった ホルスターが無い。付け忘れたのか?! 我ながら馬鹿すぎるぞチクシヨウッ。

「ん？ キミ、装備付けるの忘れてんの？ あっははははは！ ”イ

ロイロと” 自覚のない奴だなあ」

「クソッ、何なんだデメエはッ」

一歩後ずさる。彼我の距離は、十メートル。怒りよりも、焦りが先立つ。

「ボクかい？ ボクは そうだな、ちゃんと名乗っておこうか。ボクは柳辻^{なぎつじ} 天満^{てんま}と言う者だ。これから……ウーン、キミはさっさと死んじゃうかもしれないけど、ククッ。まあ、ヨロシク頼むよ？ えーと」

「響太郎 如月、響太郎だ」

馬鹿かッ。何呑気に名乗ってた俺はッ。怒りながらも焦る思考は、次に現在所持している武器へと移行する。

拳銃は 無い。なら、ナイフは……クソッ、こっちも忘れてやがる。自覚もクソも無い俺はアッ！

「あはは、そんなに怒らないでよー。まあ？ キミが何に怒ってるかは、ボクにはわからないけどねえ？」

「黙れッ」

心を読まれたようで不快極まりない……！ だが 最後の武器が俺にはある。

天満が余裕たっぷりと、さらに一歩を踏み出す。コイツ、俺が丸腰だと知って舐めてやがんのか？ なら 今すぐ後悔させてやるッ。

「ハアアッ！」

まだ覚えている。いや、それ以上だ。俺は 罐型ファストレア アイツの蹴り技を完全に体得しているのか……？ 待てッ。今はそんな余計なこと考えている場合じゃねえッ。目の前の脅威に対処することが先決だッ。

響太郎の蹴りが天満に炸裂する手前 本当以後十センチの距離で、彼の蹴りは見えない壁に阻まれた。天満は、響太郎の蹴りなどそもそも無かったと言わんばかりの表情で喋る。

「そもそもさ、ソレ、おかしいよね。ただの“人間”であるハズのキミが、どうしてガストレアと同等の技を繰り出せるんだい？」

「なッ」

天満の言動よりも、蹴りが見えない壁に防がれると言う不可解な現象に対する当惑が勝る。その隙を突き、天満が鋭いパンチを繰り出す。表情は相変わらずの軽さの上に、サディスティックな笑みが付与されていた。

「がッ」

思った以上の力だった。およそ、予備動作を殆ど行わずに繰り出されたものとは思えない。てっきりマンガやアニメのよう後方へ吹き飛ばされたかと錯覚したが、現実はそうではなかった。

「ぐ……カハッ」

息がし辛い。鳩尾に食らった突きが、体内全ての空気を口から押し出したのかと思う。身体の内部を揺さぶられるようなダメージを受けた響太郎は、千切れるでも吹き飛ぶでもなく、その場に崩れ落ちた。なんだ、コイツは。力量差が ありすぎる。目の前に居やがるのに、その姿は触れられないほどの遠くにいる。それは幻覚でも妄想でもなく、事実として響太郎に突きつけられた絶望だった。

こんなトコロで死ぬのか、俺は。

力なく腹を押さえてうずくまる響太郎にできることは、抵抗の意志を持って睨みつけることだけだった。

「おや？ ひょっとして、天満君かい？」

天満の後方から紳士らしき男の声がかかる。助かったか、と淡い思いを胸にしながら視線をそちらへずらし、間もなく失望した。

男は燕尾服にシルクハットと言つふざけた格好の上、顔には更にふざけたマスケラを付けている。見るだけでわかる。コイツはおかしい。だが、その男は幼い少女　偶然か、夏世と似た背丈だ　を引き連れている。待てよ。もしや、この男は民警か？

「あ、蛭子先輩じゃないッスかー。どこ行ってたんすかー」

天満が響太郎に対する口調と全く変わらないそれで男に話しかける。蛭子先輩と呼ばれた男の隣にいた少女が、悪戯っぽい笑みを浮かべながら響太郎の方へ視線を遣り、すぐに男の方へ視線を変える。

「ねえパパ、あの横になつてる奴斬つていいっ?！」

おねだりをする子どものような口調で、あるつことが許可を求めた内容は殺害だった。　冗談じゃねえッ。

「んー。私はこの男に興味が無いからどうでもいいんだがね。それに、一応これは“彼”の案件でもあるし」

男は、どうやら俺の殺害には乗り気ではないらしい。天満も完全に男の方へ意識を向けている。この場を打開するのなら、アイツらが踵を返した直後だ

響太郎が現状の打開策を模索し終わるのと時を同じくし、男が口を開く。

「まあそれでも、“存在しない者”の本領は、気になるよねえ」

そう言いながら、男が二丁拳銃を取り出す。マスケラに隠されているため見えようもないが、なぜか響太郎は男が笑ったような気がした。

嘘だろ。脅威が増えやがった。

こんなところで死んでたまるかよッ。

響太郎を支配しているのは、死への抵抗と　動かない身体だった。

第6話 彼らの逡巡は、如何なるものか

千寿夏世は、慣れつつある如月響太郎との生活に、ある種の不安を覚えていた。

それは、おそらく今構築できているであろう、彼との信頼関係が崩れるかもしれない。という漠然としたモノだ。

自分は『赤目』 イニシエーターであり、ある意味でヒトとは一線を画している。だが、その事実そのものは大した問題ではない。彼がそれを了解した上で自分と生活していることは、夏世自身が最もよくわかつている。

「私は……」

両手に抱えた食器に視線を落として呟く。陶器の擦れ合う音が、孤独な生活で無いことを強く主張する。だが、ありふれた生活感の中へ埋と没した彼女の言葉からは、苦悩の色がはつきりと見て取れた。

「……響太郎に、嫌われてしまうでしょうか」

私のような年齢で、他人の顔色を伺うというのは不相応なことかもしれない。ガストレアが現れる前の子ども達だったら、こんな風に育つ子はきつと少なかったのだろう。それでも、そんな『当たり前』は崩れ去った。人類の大敵であるガストレア、そしてそのウイルスを保菌した存在である私たちも 同様に忌避されて然るべきだ。EISSOで詳しく学ぶまでは想像の域を出ない事柄が多かったけれど、感覚的に察するには余りあった。

『奪われた世代』が『呪われた子供たち』に向ける恐怖と憎悪の眼差しから、どれだけ鈍くあろうとしたところで、僅かなりとも傷ついてしまう。その傷ついた心を昇華させるか抑圧するかは自由だが、夏世は後者を選んだ生きてきた。

響太郎と出会うまでは。

一度気を許せる相手ができる、そこに自身の居場所ができる。居場所ができれば、当然そこを守りたいと思う。では守るには何を必要があるだろうか。

簡単な話だ。居場所が壊れる『危険要素』を排除すれば良い。

そこまでわかっていながらも、夏世は己の取るべき行動を決めかねていた。今のままで、伝えたくないことはそのまま、きつとそれでも大丈夫だ、と囁く自分の心に、明確な反論ができない。

しかし、今日までズルズルと引き伸ばしてきたが、そうも言っていられなくなるであろう事もまた、事実だった。彼女が、響太郎と共にガストレアと『戦う』道を選択した以上、隠し通すことは恐らく不可能だ。

「こんなに言いづらくなるなんて思ってなかったのに……響太郎のばか。すぐ人のもの食べるし」

堂々巡りとも言える思考にその身を悩ませながらも、手際よく皿洗いを終え次の家事へ移る。掃除機をかけるために部屋の整理を始めた夏世は、そこで響太郎が置き忘れていったものに気がついた。閑散としたアパートの一室にて夏世が響太郎の身を案じるのと、自転車置き場の方角からガシャンと言う金属の悲鳴が夏世の耳に飛び込んだのは同時だった。

不味い。

推測される状況はいくつかあるが、こついう場合は最悪に備えて行動しなければならぬ。

自分の折りたたみナイフを上着のポケットにクリップで固定、一瞬の逡巡を経て同じく自分の自動拳銃ハンドガンを手に持ち、撃鉄ハンマーを起す。

玄関と自転車置き場とは、対極にあるベランダから階下へ躍り出る。部屋のある二階から飛び降りる程度、イニシエーターにとってはその場でスキップする事と大差がない。

音を殺しながら辺りを探る。夏世へと向く気配は感じられなかった。警報が出なかったことから、恐らくガストレアの出現ではない。……益々、最悪の事態である可能性が高まってきた。

周囲を警戒しながらアパートの前面、自転車置き場の側へと進む。進みながら三人の男の声と、一人の少女の声を確認。少女の方はその幼い声と内容から、イニシエーターだと結論づけた。そして男の内一人は、響太郎だ。その声色から、彼が劣勢であることは容易に理解できる。

アパートの角、その影に身を隠して飛び出す機会を伺う。少女にパパと言われた男が返事をし、その二言目。そいつの本音が出た瞬間に、場の緊張が急激な上昇を見せる。

今だ。

角を利用し、滑るように身を晒す。状況を確認。うずくまっている響太郎と、その眼前で拳銃を人差し指で弄んでいる茶髪の男。出で立ちこそ飄々としているが、それは自身の実力を信じていることの象徴に思われた。そしてその奥に、少し離れて男と少女を見つめる。燕尾服にシルクハット、マスケラを付けた男の方は一目見て異常者と断定。その横に付き従う少女は黒いドレスを纏い、腰に二本の小太刀を携えている。外見と装備から、戦闘に特化したイニシエーターだと瞬時に判断した。

最優先事項は

その答えはわざわざ、脳内で反芻するまでもない。まず響太郎を殴り倒したであろう茶髪を、彼から引き離すことだ。手にしているH&K USPコンパクト・タクティカルの照準を、茶髪の左足と上腹部へ連射。撃ち終わるのと時を同じくして、響太郎が声を絞り出す。

「撃つな夏世ッ！ そいつは」

響太郎が言い終わる前に、事態が言葉よりも的確な説明役を果たした。夏世の撃った四口径の弾丸は、茶髪に命中する数センチ手前で停止した。夏世は自分の目を疑ったが、やはり弾は文字通り『停止』し

ていた。

「…………え？」

認識から一秒遅れて声が出た。

「へー。これがキミのイニシエーターですか？」

自身へ届こうと、懸命に見えない壁へと突き進む弾を興味深そうに天満は眺める。クソッ、不意打ちじゃないと敵しいかもしねえ、とは思ったがこうもあっさり銃弾を止められると、やる気を無くすってんだチクシヨウ。

間抜けな声を上げた夏世へ、上半身だけで振り向いた天満は、すぐさま興味を無くしたとでも言わんばかりに響太郎に向き直った。

「だったら…………何だっつてんだよ」

腹の底から声を捻り出す。残念ながら主目的は威嚇ではなく、声を出すこと自体なのだが。

まだ声を出すことも苦痛だが、そんな身体の願望に込えている暇はない。武器を持っているのは今、夏世しかいないんだ。ここで俺がこのクソ野郎を惹きつけないと…………。

「いやあ。キミ、あんな大事なコト、あの子に黙ってていいワケ？」

あ、そもそも「コッチ」の奴らは信用ならない？」

例えるなら いや、正しい表現だろう。これが、『オモチャ扱い』という奴なのか。一撃で彼我の差が歴然たるものだと思せつけられるのは、不愉快極まりない。だが、それ以前にコイツの言っているコトが理解できない。俺が大事なコトを黙っている？ 夏世に？ そんなコトをして何の得があるってんだ。

いや…………一つだけ、言っていないことならあるか…………。でもこれは、取り立てて隠し事だと言えるほど大げさなものじゃない。俺ですら未だに信じきれちゃいないんだ。第一コイツがこのことを知っているはずがない。

その上、「コッチ」の奴らは信用ならない、だと？ 夏世は勿論だが…………蓮太郎や紫垣さんのコトだって、信用していないワケが無いだろう。そつだ。やはり、詭弁だ。

「ハハッ！ 何を逡巡しているんだい？ 響太郎くん？ この世界の人間なら、即座に返答できるはずだけど」

相変わらず自動拳銃を人差し指で弄びながら、天満が嗤う。空をも破るような甲高い笑い声が、尚の事響太郎を苛立たせる。

「その笑い声、頭に來るので辞めてもらえますか」

響太郎が天満に毒を吐こうと息を吸い込んだ時、彼の言葉を代弁するようにして、よく知った少女の、爆発寸前まで怒気を含んだ声が耳に届く。

地を蹴る、軽快な音が聞こえた。あの馬鹿、飛び込んでくる気かよ？!

「んー。賢そうに見えたんですけどねえ。思ったより直情型かな？」

銃声。ほぼ至近距離だ。相変わらずうずくまっている響太郎の視界に、夏世の足がはつきりと映り込む。天満は自分の眉間の前で漂う弾を眺めながら、夏世を小馬鹿にする。どこまでナメてやがんだッ。

「……素人が力を手にしても、ロクな結果を生みませんよ」

痛みも忘れて視線が上がった。あ、夏世さんめっちゃ怒ってる……これめっちゃ怒ってる……。先週夏世のプリン（一週間分、特売）を全部平らげて、マジギレされた時とは比べ物にならない……。冷静さで覆われた怒りマジ怖い。

「素人？」

やはり地雷だったか。いや、わざと踏んだようにも思えるが……。アイツ、あんな風に煽って勝算あんのかよ……？

天満の声質が変化したことに、響太郎は危機感を強める。その口調は『面白くない』とでも言いたげだ。これまでの言動から垣間見える性格と、彼の持っている力を合わせれば、大した努力をせずとも大概の相手を叩きのめすことができたのだから。

「まあ良いや。小づるさいガキは早く退場願おうかー」響太郎、退いて「ク、ソッ」

天満と夏世の声が重なる。というか、俺は夏世の声がかかる前に動

いていた気がする。今の夏世は何か違うが……相手も同じく、いやそれ以上に普通じゃない。或いはガストレアを相手にしていた方が、まだ頭を使わずに済んだのかも知れない。

響太郎が大きくアパート側へ身体を投げ出し、天満から距離を取る。それは、夏世と天満の間を塞ぐものが消えることを同時に意味していた。夏世の姿が目に入ったほんの一瞬、響太郎は彼女の目が赤くなっているのを認識する。

「素人に素人だと言つのは、適切だと思つのですが。それとも何ですか？ あなたの脳みそは茶髪の肥料にでもなつたんですか」

「いちいちカンに触るなア。退きなよ」

痛みを懸命に無視し、目の前の敵から距離を取ろうとする響太郎。その視界の隅で、夏世が目に見えないフィールドを相手に、対処しづらそうな打撃や蹴撃を繰り返している姿を捉えた。まだ詳しくわかっていない能力を相手に、よくあそこまで順応できるな、と響太郎は素直に感心してしまった。

「まず一つだけ言っておくことがあります」

「別にボクは聞きたくないんだけど」

「拳銃を人差し指で回すそのクセ。辞めた方が良いですよ、お里が知れます」

「五月蠅いなア」

冷めた目の下に付いた、これまた薄い唇の隙間から流される言葉は、罵倒。天満はその声色から、ハッキリと苛立ちを主張する。どうやら、夏世の作戦は有効なようだ。天満のカウンターが徐々に大振りになってきている。このままなら押し切れ

「パパー、なんかつままないー。あのちっちゃい奴、もう斬っていいでしょ？」

「ふむ……そうだな。彼”の”イニシエーターだと言つからもしや、とも思ったが。思い過ごしたたかもしれないな……」

しまった。天満とは比べ物にならないくらいトチ狂った奴がまだ残ってやがったじゃねえか！ 天満一人相手に、なんとか勝てるか否

か、という状況で更に敵が増えたら……そもそも戦闘向けのモデルじゃない夏世には分が悪いッ。

「いい加減、鬱陶しいなあ　消し去れッ、『クリスタル・ナハト』ッ」
天満が言い切る寸前、危機を感じたのか夏世が左へ飛び退る。直後、一瞬前まで夏世の立っていた地に、不可視の杭が大量に刺さった。この野郎……容赦なくミンチにする気だったってのかッ。

「……響太郎っ」

「お前、凄いな」

響太郎の元へ上手く飛び退った夏世に、うっかり賞賛を送ってしまった。言ってるから、夏世の口調が自分を『心配しているものではない』ことと気がついた。彼女の表情は、先ほど天満を罵倒していたそれとは異なり、告白前の乙女のような逡巡を露わにしている。

「響太郎」

「なんだ」

「ん、と……」

何を渋ってるんだ、珍しく……。

二刀を携えたインシエーターはマスケラの言葉で動くようだが、肝心のマスケラが何を考えているのかわからない。いつ動き出すかわからないこの相手は、全くもって不可解であり、不愉快だ。一方の天満は、もはや苛立ちを隠すことさえ辞めていた。目つきから小馬鹿にした態度が失せ、響太郎たち二人を捻り潰さないと気が済まない、と言っほどに殺気立っている。ついでに歯ぎしりもしている。

「ごめんなさい……響太郎」

「なんでお前が謝るんだよ」

状況への焦燥感から、刺々しい口調になってしまっ。言ってから夏世の表情を見て、響太郎は少し悔やんだ。

この絶体絶命とも言えるピンチより大切なコトが、何かあるのか……？

その意味深長な表情が、響太郎に天満の言葉をフラッシュバックさ

せる。

『いやあ。キミ、あんな大事なコト、あの子に黙ってていいワケ？
あ、そもそも“コッチ”の奴らは信用ならない？』

クソ食らえ。クルクル回した拳銃をうっかり引っ掛けて、自分の肩に排水口でも作ってやがれ。

俺は

「あの」

「……あ？ あ、あぁどうした？」

とっくに解りきった、どうでもいい思考に意識を奪われるとは情けないぞ俺！

「私……」

「気にすんな」

「え？」

夏世が呆けた顔で見上げる。この顔二度目だな、今日。なんか、今日は夏世さん表情豊富だな……。ひょっとして俺命日なんじゃないの。やめてよね。

「何があってもお前を嫌ってやったりなんてしねえから。心配すんな」

「……っ」

夏世が突然下を向く。いや、日常生活でしてくれるなら豊富な表情ありがとう！ でカタが着くんだが……。今は状況が状況だと思えますよ夏世さん。……まずい、ついに天満の野郎がブツブツと呟きだしたぞ。

「わかりました」

軽く深呼吸をして、一拍。夏世が再度口を開く。

「私、この後 『戻れなく』なるかもしれない」

「……はっ」

今度は響太郎が呆ける番だった。

「その時は……私を撃ち倒してでも、戻してくれませんか？」
……。

なんだこの展開は。

第7話 覚醒か、本性か

元に戻れない？ どういうことだ、お前

「任せましたから。信じています」

「おう任せろ！ ってそうじゃねえ待て待て」

響太郎が最後まで言い切る前に、夏世の目が赤く光り、そして彼女は次の瞬間消えた。

正しくは、消えたように見えた、だが。

「……消えろ」

響太郎は、その無造作な殺意に満ちた声が夏世のものだと、すぐに気づくことができなかった。

それは余りに低く、そして余りに冷たかったから。

「な……ッ!？」

動揺を含んだ天満の音が、耳に飛び込む。視線をやると、天満の懐に見慣れた姿を確認した。何が起きているのか響太郎には皆目わからなかったが、唯一わかったこと それは夏世の目が赤くなっており、表情から感情が抜け落ちている、ということだけだった。

夏世の拳や蹴りが、斥力フィールドに叩きつけられる。

「やはり厳しいですか」

「邪魔だアッ」

当惑する響太郎をよそに、天満が再度『クリスタル・ナハト』を夏世に向かって叩きつける。身体を左へ捻り、それを回避する夏世は、

まるで予測していたかのような動きだ。直後、夏世の目つきが更に暴力的なものに変化し、腹に掌底を打つ。その動きはあまりに素早く、響太郎には夏世が何をしたのか、天満が驚愕に目を見開きながら後ろへ吹き飛ぶ瞬間を見てもなお、わからなかった。

「……不可視の盾とは言え、展開していなければ、勝てる」

一語一語に重みを付与して夏世が喋る。彼女の表情に、薄気味悪い微笑が張り付く。暴力を愉しんでいるかのような、そんな笑みだった。響太郎は一抹の不安を覚えたが、それは現実の危機によって掻き消される。

「パー？ あいつ何？ もう斬っちゃいたい！」

「……ふむ、そうだな。どうにも興が削がれる動きだ。小比奈、斬ってきなさい」

「やったー！」

「ッ」

焦燥感に駆られ、声が漏れる。夏世の元へ行こうかとも思ったが、自身が丸腰であったことに気が付く。

ああクソッ、俺は、俺は何も出来ねえのかよ！ アイツに、夏世一人だけに戦わせて

「じゃあ、ねッ！」

「五月蠅い」

小比奈と呼ばれたイニシエーターが、瞬時に夏世へ詰め寄る。嬉々とした感情を含み二刀で斬りかかる小比奈に、夏世は一言だけ返した。

緊張が最大にまで達し、二つの剣戟音により開放される。

「斬れなかった？」

「……」

疑問符を浮かべる小比奈と、冷たく睨みつける無言の夏世。気づけば夏世の手には、大きなサムホールとダガーに似た形状が特徴のフォーレンジングバイク折りたたみナイフ、スパイダルコ ネイティブが逆手で展開されていた。

相変わらず自身の動体視力を超えたままの事態に響太郎は啞然とするが、当然のように攻撃を防いだ夏世へ向ける感情が、揺らぎを見せる。

あいつ、あんな凍った目をする奴だったか？

「おっと、時間のようだ。小比奈、行くよ」

「えー？ こいつムカつくから斬りたい！」

「もう時間が無いからね。今日のところはここでお終いだ」

「うー。つまんないー」

小比奈が斬撃を繰り出し、夏世があしらう。小比奈の動きは捉えきれないが、それでも素人の響太郎にすら彼女の動きは確実に殺しに来ている者の動きだとわかった。そんな攻撃を行いながら呑気に話しているのだから、尚の事底がしれない。

しかし、ここで二人が退場することは、響太郎たちにとって都合の良い状態だった。響太郎は視線を夏世、その奥でよろよろと立ち上がる天満に向けつつ、耳はマスクラ男の方へ集中させる。

「さて、後は天満君に任せるがいいかね？」

「……ッ、当然だッ」

「では、私達はこれにて」

頭を抑えつつ立ち上がる天満の語気から漏れ出る、苛立ち。いつの間にか小比奈はマスクラ男の元へ戻っており、響太郎が天満の方へ意

識を向けている間に二人ともどこかへ行ってしまった。今になって響太郎は、「取り逃がした」と言う気持ちよりも「助かった」と言う気持ちの方が大きいことを自覚する。

「夏世っ！ 大丈夫か!？」

「ダメージは軽微」

「ゴチャゴチャと五月蠅え……ぶち壊せ」クリスタル・ナハト」

響太郎が夏世の返答に疑問を覚えるより時を早くして、天満が不可視の杭を多数、夏世へと撃ち込む。だが、撃ち込まれた先にあったのはただのコンクリートだった。右に旋回して回避、夏世はナイフを逆手に持ったまま右ストレートを叩き込むが、斥力フィールドに防がれる。力比べを瞬時に終えた彼女が蹴りを放つ。天満は斥力フィールドによって防いでこそいるものの、その表情からは余裕が失せかけていた。

「野蛮なガキめ……ッ。興が削がれるんだよ!」

夏世の膝蹴りを斥力フィールドで防ぎ、天満がバックステップ。拳銃を上着の中に戻し、そのまま右腕を引き絞る。

「ちょこまかと鬱陶しい! 『デビルズ・ジャッジメント』ッ!」

言い終えるや否や、天満の姿が霞み、夏世の目前へと迫る。咄嗟に回避行動に出ようとすると夏世だが、間に合わない。これまでのあらゆる動きより速い、それこそイニシエーターと同速の。それほどまでに彼の拳は速く、響太郎の目では追えなかった。渾身のストレートが放たれる。苛立ちを全て前面に押し出すような、そんな印象だった。

「ガ、ハッ」

「チツ、殺る気が失せたよ。」

響太郎くん、いずれまた会おう」

衝撃で吹き飛ばされる夏世を尻目に、天満は歩き出す。響太郎に背を向ける彼は、一見無防備にこそ見える。しかし自分の今の力量では不意打ちをしたところで到底及ばないことは、響太郎自身が最もよく理解していた。

悔しさを堪えつつも、夏世に意識を切り替える。

「お前、何無茶してやがんだ！」

「あ……響、太郎……」

肩にストレートをモロに受けた夏世の目からは赤色の輝きが失せ、朦朧としていた。介抱する響太郎をよそに、夏世は安心したように漏らす。

「良かった、まだ、私が私でいられた……」

第8話 力が欲しいなら

俺は土下座をしていた。

「本ツツツツ当に申し訳ありませんでした」
「……………」

夏世は黙ったまま肩をさすっている。あの威力の攻撃を受けて、既に回復が始まっているのは彼女がインシエーターだからだろうか。

「完全に俺の失態です」
「……………私は」

響太郎の額とコンクリートが熱烈なキスを交わす中で発された夏世の声は、見るからに苛立っていた。

「私はいらいらしています」
「すみませんでした。弁解の余地もありません」

俺が、もっと戦えていれば。そもそも、装備を忘れてなどいなければ。そうすれば……………夏世はこんなに傷つけられなかったかもしれない。

額をさらに押し付ける。謝罪とは、その意思を伝えることが最も難しいカテゴリだ。どうしようもなく馬鹿な格好でも、やれること全てをやらなければ伝わらない。……………全て行ったところで伝わるとも限らないのだが。

「何ですかあのクソ野郎は！」
「申し訳ありませんでした!!! ……ん？」

珍しい。夏世が代名詞を間違えるなんて……………待てよ。やはりそれほどまでに怒っていると言うことか。いや……………それも当然か。俺はあいつ一人に戦わせてしまった。まるで道具か何かみたい……………。クソツ、そんなんじゃ結局は俺も他の差別主義者と同じじゃねえかツ。

「コラ聞きなさい」

「……………ハッ……………す、すみません!」

「全く……………なんでそんなにひれ伏せてやがるんですか。別に響太郎について怒っているわけじゃないです」

「本当に、本当に申し訳……………え」

「だーかーらっ」

「……………はい」

「あの飄々としたクソ男のことです!!」

珍しく夏世が怒りを表層に表したことに、響太郎は驚いた。だが実際その男 柳辻 なぎつじ 天満 てんま に対し、響太郎は手も足も出なかったと言う苦い思いしか無い。それが原因で夏世に無理をさせたことを改めて認識し、自分自身に憤る。

「……………クソ……………」

「あの」

「?」

夏世が突然いつもの口調に戻り当惑し、うっかり顔を上げてしまった。額にはまだコンクリートのアツイ感覚が残っている。

「確かに響太郎は無能で馬鹿でどうしようもないグズです。本当に何故あなたをプロモーターにしてしまったんでしょうか。もし過去の私に会えたならロードローラーで轢きます。ついでに響太郎も轢きます」

「いつそのこと轢いてください俺だけを！」
「は？」

夏世の目から表情が失せる。そして視線が凍る。まるで矢のようだった。

なぜ出来たかはわからないが、ガストレアを蹴倒したことで俺は調子に乗っていたんだ。肝心のところでは糞の役にも立たなかったのに……最早轢き潰されても文句は言えん。

「嫌に決まってるじゃないですか」

「なぜ照れるんですか」

「私の帰る場所が無くなってしまいます」

「な……」

怒っていたかと思いきや、いきなり照れに入った夏世を見て響太郎は少し動揺する。

だが、その動揺の理由を思考することは出来なかった。

「えー……」とほん。と、言うわけで、響太郎には特訓してもらいます」

「は？」

反射的に呆けた返しが出る。同じ台詞を言って、こんなにも重みに違いがあるのかと逆に感心した。

「……ってまあ、より実戦的な力をつけなきゃならねえとは思う。ガストレアを素手で倒すとか……そんなどうやったかすらわからねえ力で敵と戦うのは、馬鹿のすることだ」

「今の今までその馬鹿でしたよね」

「っつ」

悲しいかな、凶星だった。

「そ、それで、だ」

「なんですか馬鹿さん」

「それ敬称つける意味ねーから！ ……んで、特訓つってもな……」

「ちやんとアテがあります」

「マジかよ」

「当然です」

「なんでもっと早くに言ってくれなかったんですか」

「予想外の敵が現れたからに決まっています」

ああ、そういうことか……天満の野郎や、奥にいたマスケラ男の強さは多分ステージ 程度のガストレアは一蹴できるんだろう。マスケラに至っては、イニシエーターがいながら自分はその隣に立つ堂々っぷりは、自身の戦闘力に自信があるからだ。かく言う俺も……そうだった。その自信は一瞬で粉碎されたが。

「それと響太郎がゴミ屑のように弱かったのもありますね」

「ぐ」

「では早速行きましようかゴミ屑」

「馬鹿野郎俺は負けんぞ俺は……」

精神的な面だな！

「次あのチャラチャラした男に出会った時は、視線だけで捻り殺せるようになりましよう」

「なにそれこわい」

「自称サポート系の私に戦わせたんですから、代償としてそれくらい強くなってもらわないと」

「え、論に繋がりが見えないんですが」

「そうじゃないと心配で胃に穴が開きます」

「す、すまん……」

「開いてもすぐ治りますけどね」

「俺の感傷返せ！」

照れ隠しだと思おう、うん。脳内の精神安定委員会による決定事項です。

「……ってか、行くってどこに行くんだよ」

俺学校行こうとしてたんですが。別にいいけど。

「少し前に知り合ったイニシエーターなんですけど、とても強いです。プロモーターもかなりの強者で、IP序列は私が聞いた時で305位でした」

「305位!? めちゃくちゃ強えじゃねえか！」

「高性能なエクサスケルトンを身につけていましたし、強力な後援者パトロンがいるのだと思います」

「なんだそれ……そんな奴に戦闘を教えてもらうなんて出来んのか？俺たちのIP序列なんざ下から300位くらいにすらなってるねえの」

「つまらない冗談ですね」

「すみません……」

今日の夏世さん毒舌キツイつす。でも、危険に巻き込んだのは俺だし……… やっぱり強くなる方が先、だな。精神安定なんざ二の次だ。ノイローゼを起こさないように気をつけよう。

「ところで彼女のプロモーターはゴツイスキンヘッドのおじさんです」

「ヤザかよ……」

毛筆で俠気とか書かれた奴が部屋に貼ってあるんじゃないかなろうか

……思ったより早くノイローゼになるかもしれん。

「ま、まあ人は外見じゃねえよな。うん」

「響太郎は外見通りだと思えますが」

「どういう意味だ！」

「そろそろあなたがノイローゼになりそうなので言わないでいてあげます」

「……」

話を、逸そう。

「それで、お前の知り合いつてなんて名前なんだ？」

「うわ、幼女趣味」

「なんでそうなる……」

ドン引きされている……口を開けば墓穴しか掘らないんじゃないかねーかコレ。

「……えと、名前ですよね。朝霞^{あさか}ちゃん、壬生^{みぶ} 朝霞^{あさか}ちゃんです」

「この辺には……いねえよな」

「はい。中央の方にいますので、行きましょう」

「連絡しないのか？」

「大丈夫ですよ」

そう言っつて夏世が口元を綻ばす。その黒い微笑を響太郎は見なかつたことにした。過去に一体何があつたのか気にはなつたが、多分聞いたら胃が泣いてしまう。穴が開く的な意味で。夏世さんコワイ！

淡く薄雲のかかった晴天の元、駅に向かって二人は歩き出す。夏世に対して、何か重要なことを聞きそびれている気がした。

第9話 久しぶりの

俺と夏世は、近くの駅から電車に乗った。行き先は朝霞と言う少女のいると言う中央に向かって、だ。

「いやーっかし誰もいねえなあ」

「こんな時間に乗る人は寝坊か馬鹿か響太郎くらいしかいません」

「えっすいません」

うっむ、やっぱり単騎で謎の相手と戦わせたこと怒ってるな……。非は俺にあるし、このくらいの棘は甘んじて受け入れよう……。

「……ってその三択じゃ夏世は寝坊か馬鹿になっちまうな」

「何言ってるんですか」

「えっ」

「私は三番目ですよ」

「……ん？ ……………ん？」

ジョークのつもりで茶化したら、理解不能な回答が返ってきた。もやとボール投げていい？ ちょっと夏世さんIQ高すぎんよ。三番目って俺じゃん。どう見ても違うじゃん。それともアレ？ 高度なネタ？ すまん、どうやら俺の知能指数は牛レベルみたいだ。

「もおー」

「!? ど、どうしたんですか突然、牛の鳴き声なんてして」

ビクリと身体を震わせ、露骨に驚く夏世。そりゃ当然か。

「似てただろ」

「全くさっぱり全然」

「うそやん」

「……家畜願望でもあるんですか」

「うわーその目マジでこわいです違いますばくは人間のままでいたい
です」

「じゃあ本当に頭がやられたんですね……」こ愁傷さまです」

「い、いやお前の言ったことがよく分かんなくてさ」

「この年齢の子に頭の心配されると、結構堪えます。

「え、あ、あれですか」

「なぜ動揺する」

「あ、あれはその、あれです」

「お、おう」

夏世が突然うつむきもじもじし始める。貸し切り状態の電車の走る音が、せせら笑っているようにしか聞こえない。いや、違っからね。俺幼女に無理強いさせてるワケじゃないから。……って誰に弁解してんだ俺。こりゃ真剣に医者を検討した方が良いんじゃないのか……。

「わ、私は響太郎のイニシエーターですから……きよ、響太郎の一部、みたいなものです。で、ですから、わたた、わたしは響太郎なんです
！」

「オーケーオーケー、クールダウンだ。頭を冷やそう。暑いもんなあ
今日」

誰もおらず非常に涼しい車内。天気も良好。イイネー東京エリア、
最高。

「じ、じろします……」

「なぜ……」

変な汗出てきた。やっぱり今日暑いんじゃない？

目をぐるぐるさせ、口をあわあわと動かす夏世。見方によってはとても小さく可愛らしさを含んでいるのも関わらず、発言内容が物騒すぎて色褪せる。表情に思い切り動揺を現す夏世と、額に冷や汗を滲ませて引きつった苦笑いを漏らす俺。見つめ合う二人、その怪しい準犯罪現場を見咎めるように電車が止まった。停車時の揺れに合わせて理性が帰ってくる。

「コホンコホン……と、とにかくですね。インシエーターとプロモーターは二人で一つなんですから、ちゃんと自覚してください！ ね！」

「は、はい……」

大きさに咳払いをして纏めた夏世だが、話がずれている気がする。咳払いが若干動揺していたことと、最後の「ね！」が投げやりな言い方になっていたのは指摘しないぞ。言ったら毒にやられる。

「あれ？ あなた夏世じゃない？」

「……？」

夏世側の扉から入ってきた少女から声をかけられる。声の方へ振り向いた夏世と同じくらいの年齢だろうか。全体的に短めの大人しいヘアスタイルの、少々キツそうな目つきの子だ。思索してから程なくして夏世が口を開く。

「ほたる火垂り？」

「やっぱり夏世ね。少し体型が膨れてたから分かりづらかったけど」

「……火垂こそ幸せそうに艶々しているから分からなかったです。お年ごろなんですね」

「……あ、相変わらずだね」

「ふふ、火垂こそ」

旧知の仲か？ 俺の時と比べて遜色ないくらいの毒だが……相変わらずって、想像するだけでヤバイ。

蚊帳の外に捨てられっぱなしの俺が余計な詮索と浅い回想をしていると、どたどたと喧しい音を立てて学生服を着た男が同じ扉から駆け込んできた。

「あつぶねー！ 間に合ったぜ……」

「もう、遅いじゃない鬼八さん」

「いやーわりいわりい」

「ん……？ 鬼八……？」

リバイバル回想。どっかで聞いたぞ……鬼八……鬼八……蓮太郎と、確か……。

「あ」

「ん？」

「お前鬼八かよオ！」

「な、何だお前！ ……って、響太郎、か？」

まじまじとお互に見つめ合う。男を見つつ、我ながら自分の行動が気持ち悪いと思ったが確認が先決。仕方ないね。

「やっぱ鬼八だよなお前」

「おうよ」

「んで俺は響太郎だ」

「だよなあ」

しばし沈黙。電車はいつの間にか進みだしていた。

「久々だな響太郎！」

「な、相変わらずうつさいなお前」

「馬鹿野郎お前、折角久しぶりに会ったのに騒がない奴がいるか！」

「ここ電車じゃねーか！」

しまった、うつかりツッコんでしまった。そういやコイツのバカっぽさには、当時小四の時の俺や蓮太郎は結構助けられたっけな。同じくガストレア大戦で家族を奪われた身からすりゃ、凄えと思ったもんだ。……最も『今』の俺、もう一つの方の記憶じゃ俺の家族は生きてるんだよな……転生って言ったら普通、記憶は一本線で続くんじゃないのかよ。まあどうでも良いけどな。

「って響太郎お前、民警なんかになつたんだよ」

「え？ あー。まあ色々あってな」

いつの間にか鬼八が隣に座っていた。ちらりと夏世の方を見ると、火垂と呼ばれた少女は夏世の隣に座っている。談笑しているようだが、どんな内容かは高度な毒棘合戦に巻き込まれたくないため、聞かない。

「てか鬼八、お前らもどっか行くのかよ」

「ああ。民警とか学校とか面倒な事は置いて、今日は火垂と一緒に遊びに行くんだー」

「え、何それ引く」

「オイオイ何言ってるんだ、火垂は俺の妹みたいなモンなんだぜ？ たまに遊びでも連れてってやらなきゃよ」

「……………あー、そりゃまあ」

鬼八は確か……………実の妹が赤目だったんだよな。この火垂って子は妹代わりみたいなものか。別段、他人のやり方に口を出す気は無いが……………コイツもコイツで大変なのかもしれないし。

「いや待て」

「ど、どうした」

「鬼八お前民警かよ！」

「なんだ今更！」

「わかるか普通！」

「は？ わかるだろそりゃ」

「エスパーか!？」

「いやいやいや、不自然に小さい女の子連れてる奴なんて民警くらいだろ。……まあ、あんま幸せそうな顔してる子には会ったこと無いけどよ」

「それもそうか……」

と、言うことはだ。つまり世界を間違えてたら俺は犯罪者……？
それは流石にまずいですよ……。

「で、お前はどこに行くんだ？ 今日学校じゃねえの？」

「堂々と遊びに行く宣言してるお前には言われたくねえよ！ ……どこ行く、か……うーむ」

なんて言うんだ、これ？ 夏世のツテで怖そうなおっさんの元へ修行をしに行くって言えばいいのか？ より都会チックになってきた窓の外をぼんやりと見ながらあれこれ考えるが、結局ウマイ言い訳は思いつかなかった。

「まあ、あれだ……特訓しに行く」

「なんだそりゃ！」

がはは、と鬼八が大袈裟な笑い声を立てる。仕方ないだろ！ 他に
適当な言葉が無かったんだから！

「てことは何か？ 響太郎、民警になったの最近か？」

「ああ、ついこの間だ」

「んじゃ、あのステージ は知らねえか？」

「ステージ？」

「先月出たデケエガストレアだよ。確かスコーピオンとか言ったと思うが……噂じゃ触媒がどうだの出現時期がおかしいのと、しっちゃんかめっちゃんかだ」

「そんなヤバかったのかよ」

「並大抵の民警が百人束になってかかっても勝てなさそうな奴だったけどな。なんか気づいたら倒されてて拍子抜けしたぜ」

「誰が倒したんだそれ……」

一騎当千とか漫画の中だけの話じゃなかったのかよ……。そいつ一人で東京エリアの守護は事足りる気がするな……。

「響太郎」

「？ どうした夏世」

夏世が学生服の裾を引っ張っていた。振り返った俺が返事をして後、少し遅れて電車が停まる。

「着きました」

「おう。……んじゃな鬼八」

「ああ。またな」

「それじゃ夏世、また機会があれば」

「はい、また会いましょう」

軽く別れの挨拶をする。夏世と火垂も心なしか嬉しそうな表情をしていた。お互い昔の友だちと出会えただけでも、今日出てきた甲斐はあったのかもしれないな。

「あ！ ちょっと待て響太郎！」

「んだよ！」

「連絡先交換しよーぜ」

「そついや忘れてたな……って扉閉まるわ！」

危ねえ！ 足を外に踏み出した途端にコレだ。間に落ちたらどうしてくれんだこのストコドッコイ。と言つか、携帯を出してもうっかり隙間に落としかねない。残念だが今は出来そうにないな。

「さっき夏世と交換したから、それを経由すれば良いじゃない」

「お、さっすが火垂！」

言いながら鬼八がくしゃくしゃと火垂の頭を嬉しそうに撫で回す。ホントに家族だと思ってんだろうな、きつと。勿論俺も夏世の事、大切に思ってるけどな。赤目だの呪われた子ども達だの、クソ食らえだ。こいつらだって……人間なんだから。

「ってもう俺出るからな！。後で火垂ちゃんから夏世に送ってくれよ」

「あ、はいっ。わかりました」

突然呼ばれて驚いたのだろうか、ふいっと顔を向けて返事をした火垂の表情は少し緊張していた。

「ありがとう。んじゃまた」

「はい、それでは」

「じゃーなー」

丁寧に返す火垂と適当に返す鬼八、その対称性は何か突き刺さるモノがあったが気にしないでおこっ……。

「それでは、行きましょつか」
「……だな」

扉が閉まり、電車が進みだす。それを見送り、俺と夏世は今日の目的地 壬生朝霞のプロモーター、我堂長政の住処へと歩を進めた。